アウトリュコスへ

テオフィロス
藤遥　制作

第一巻 1〜5章　神を見る魂の目と、わざによって知られる神

1:1:1 たしかに、よく回る口と美しい言い回しは、知性の腐ったみじめな人々に楽しみを与え、むなしい栄光のための称賛を与えます。しかし、真理を愛する者は、飾り立てた言葉に心を留めません。その言葉に伴う行いが何であり、どのようなものかを調べるのです。1:1:2 友よ、あなたはむなしい言葉でわたしを閉口させました。石や木の神々、打ち延ばした神々や鋳た神々、形作った神々や描いた神々を誇ったのです。それらは見ることも聞くこともしません。偶像であり、人の手のわざだからです（詩篇一一五・四〜六）。そのうえ、あなたはわたしを、悪い名を帯びている者のように、キリスト者と呼びます。それで、わたしは、たしかに自分がキリスト者であると告白します。神に役立つ者でありたいと望んで、神に愛されるこの名を帯びているのです。1:1:3 あなたが考えているように、神の名がわずらわしいものだということはないからです。むしろ、おそらく、あなた自身がまだ神に役立たない者なので、神についてそのように考えているのでしょう。

1:2:1 しかし、あなたが「あなたの神を見せなさい」と言うなら、わたしもあなたに、「あなたの人を見せなさい。そうすれば、わたしもあなたにわたしの神を見せよう」と言うでしょう。それなら、あなたの魂の目が見えていて、心の耳が聞こえていることを見せなさい。1:2:2 体の目で見る人々は、暮らしと地上の営みを見て取り、同時に、違いのあるものを見分けます。光か闇か、白か黒か、形の悪いものか美しいものかを見分けます。釣り合いがとれて程よいものか、釣り合いが悪く度を外れたものか、大きすぎるものか切り詰められたものかも見分けます。同じように、耳に入るものも、鋭い音か重い音か快い音かを聞き分けます。それと同じように、心の耳と魂の目にも、神を見ることができると言えるからです。1:2:3 実際、神を見ることのできる人々は、魂の目が開いているとき、神を見るのです。だれでも目を持っていますが、ある人々の目は曇っていて、太陽の光を見ないからです。1:2:4 目の見えない人々が見ないからといって、太陽の光が輝いていないわけではありません。そうではなく、目の見えない人々は、自分自身と自分の目を責めればよいのです。1:2:5 人よ、あなたも同じです。あなたの魂の目は、あなたの罪と悪い行いのために曇っています。磨き上げた鏡のように、人は清い魂を持っていなければなりません。1:2:6 ですから、鏡にさびがあると、人の顔は鏡に映りません。同じように、人に罪があると、そのような人は神を見ることができません。1:2:7 それなら、あなたも自分自身を見せなさい。姦淫をする者、不品行な者、盗む者、略奪する者、だまし取る者でないかどうか。男色をする者、不遜な者、そしる者でないかどうか。怒りやすく、ねたみ深く、大言壮語し、人を見下す者でないかどうか。乱暴で、金を愛し、親に逆らい、自分の子供を売る者でないかどうか。それを見せなさい。1:2:8 このようなことを行う人々には、まず自分をいっさいの汚れから清めないかぎり、神はご自身を現されないからです（第二コリント七・一）。ですから、これらすべてのことが、あなたの目も暗くしています。目に濁った液が流れ込むと、太陽の光を見つめることができなくなります。人よ、それと同じように、あなたも不敬虔な行いに目を暗くされて、神を見ることができないのです。

1:3:1 すると、あなたはわたしに言うでしょう。「見えるというあなたが、神の姿をわたしに語ってみなさい」。人よ、聞きなさい。神の姿は口にすることができず、言い表すことができません。肉の目では見ることができないのです。1:3:2 神は、栄光において何ものにも収まらず、大きさにおいて計り知れないかただからです。高さは思いも及ばず、力は比べるものがありません。知恵は推し量ることができず、善はまねることができず、恵みのわざは語り尽くせません。実際、わたしが神を光と言うなら、神の作品を言っているのです。ロゴスと言うなら、神の主権を言っています。知性と言うなら、神の思慮を言っています。霊と言うなら、神の息を言っています。知恵と言うなら、神の生み出されたものを言っています。強さと言うなら、神の威力を言っています。力と言うなら、神の働きを

言っています。摂理と言うなら、神の善を言っています。王国と言うなら、神の栄光を言っています。主と言うなら、神を裁くかたと言っています。裁くかたと言うなら、神を正しいかたと言っています。父と言うなら、神をすべてと言っています。火と言うなら、神の怒りを言っています。1:3:3 すると、あなたはわたしに言うでしょう。「神が怒るのか」。まさにそうです。神は悪いことを行う者たちに怒られます。しかし、神を愛し、神を恐れる人々には、善く、慈しみ深く、あわれみ深いかたです。神は、神を敬う人々を訓練するかたであり、正しい人々の父である一方、不敬虔な者たちを裁き、罰するかただからです。

1:4:1 神には始まりがありません。生じたかたではないからです。また、変わることがありません。死ぬことのないかただからです。神（テオス）と呼ばれるのは、すべてのものを、ご自分の堅固さの上に置かれた（テテイケナイ）からです。また、駆けておられる（テエイン）からでもあります。駆けるとは、走ること、すべてのものを動かし、働かせ、養い、配慮し、治め、生かすことです。1:4:2 神が主であるのは、万物を支配しておられるからです。父であるのは、万物より先におられるからです。造り主であり作り手であるのは、万物を創造なさり、作られたかただからです。いと高きかたであるのは、すべてのものより上におられるからです。全能者であるのは、ご自身がすべてのものを掌握し、包んでおられるからです。1:4:3 天の高みも、淵の深みも、世界の果ても、神の御手の中にあるからです。神の休み所となる場所はありません（イザヤ六六・一）。1:4:4 実際、天は神のわざです。地は神の作品、海は神の造られたもの、人は神の形造られたものであり、神のかたちです。太陽と月と星は神の天体であり、しるしのため、季節のため、日のため、年のためにできたものです（創世記一・一四）。それらは、人に仕え、人のために働くためにあるのです。神は、すべてのものを、ないものからあるものへと造られました。そのわざによって、神の偉大さが知られ、悟られるためです。

1:5:1 人の魂は人の目に見えないので、見られることはありません。しかし、体の動きによって、魂のあることが悟られます。それと同じように、神も人の目で見ることはできませんが、その摂理とわざによって、見られ、悟られるからです。1:5:2 実際、海の上で、船がよく整えられて走り、港に入っていくのを見る人は、それを操る舵取りが中にいると考えるに違いありません。それと同じように、神が万物の舵取りであることを悟らなければなりません。たとえ、神が何ものにも収まらないかたなので、肉の目には見えないとしてもです。1:5:3 そもそも、太陽はごく小さな天体にすぎないのに、人は、その並はずれた熱と力のために、太陽を見つめることができません。それなら、死ぬべき人間が、言い表しようのない神の栄光に向き合うことは、なおさらできないのではありませんか。1:5:4 実際、ざくろは、自分を包む皮を持ち、内側には、薄い膜で仕切られた多くの部屋と房があり、そこに住む多くの粒を持っています。それと同じように、すべての被造物は神の霊に包まれ、包んでいる霊は、被造物とともに神の御手に包まれています。ですから、ざくろの粒は、内側に住んでいて自分も中にいるので、皮の外にあるものを見ることができません。それと同じように、人も、すべての被造物とともに神の御手に包まれているので、神を見ることができないのです。1:5:5 それに、地上の王は、すべての人に見られるわけではないのに、いると信じられています。その法と命令、役人と軍勢と像によって、王がいることが悟られるのです。それなのに、あなたは、神がそのわざと力ある働きによって悟られることを、認めようとしないのですか。

第一巻 6〜9章　わざに現れる神、信仰への招き、死んだ人間である神々

1:6.1 人よ、神のわざをよく見なさい。時に応じて季節が移り変わり、天候が変わります。天体は秩序正しく走り、昼と夜、月と年は秩序正しく進みます。種と草木と実は、それぞれに違う美しさを持っています。四つ足の家畜、鳥、這うもの、泳ぐものは、川のものも海のものも、さまざまに子を生みます。また、生き物そのものに、子を生んで育てるわきまえが与えられています。それは、生き物自身が用いるためではなく、人が得るためです。神は摂理によって、すべての肉なる者に食物を備えておられます（詩篇一三六・二五）。また、すべてのものが人類に従うように定めておられます。甘い泉と尽きることのない川が流れ、露と雨と夕立が、時に応じて与えられます。天にあるものは、きわめて多様に動きます。明けの明星が昇り、完全な光体が来ることを前もって告げます。プレアデスとオリオンの鎖があり、アルクトゥルスがあり、ほかの星々は天の輪を巡って輪舞します（ヨブ九・九、三八・三一）。神の多種多様な知恵が、そのすべてに、それぞれの名を与えたのです（エペソ三・一〇、詩篇一四七・四）。1:6.2 この神だけが、闇から光を造られたかたです。南の密室、淵の倉、海の境、雪と雹の倉も、この神が造られました（ヨブ九・九、三八・二二）。神は、水を淵の倉にお集めになり、闇をご自分の倉に集められます。甘く、慕わしく、喜ばしい光を、ご自分の倉から取り出されます。地の果てから雲をのぼらせられ、雨のために稲妻を増し加えられます（詩篇一三五・七、エレミヤ一〇・一三）。神は雷をお送りになって恐れを起こさせられ、稲妻によって雷の轟きを前もって知らせられます。魂が突然かき乱されて、息絶えることのないためです。それだけでなく、天から下る稲妻も、地を焼き尽くさないように、ちょうど足りるだけに量っておられます。稲妻が思うままにふるまうなら、地を焼き尽くすからです。雷もそうなら、地にあるものを覆してしまうでしょう。

1:7.1 この神こそ、わたしの神、万物の主です。ただひとり天をお張りになり、天の下の地の広さを定められたかたです（ヨブ九・八、三八・一八）。海の深みをかき乱され、その波を響かせられ、海の力をお治めになり、波の荒れを静められるかたです（詩篇八九・九）。地の基を水の上にお据えになり、地を養う霊を与えられたかたです。神の息は万物を生かします。神がその霊をご自分のもとにとどめられるなら、万物は絶え果てるでしょう。1:7.2 人よ、あなたはこの神のことを口にし、この神の霊を吸い、それでいてこの神を知りません。このことがあなたに起こったのは、魂の盲目と心のかたくなさのためです。しかし、あなたが望むなら、いやされることができます。自分を医者に任せなさい。医者は、あなたの魂の目と心の目を、針で突き開いてくださるでしょう。1:7.3 その医者とはだれでしょうか。神です。ロゴスと知恵によって、いやしてくださり、生かしてくださる神です。神は、ご自分のロゴスと知恵によって、万物を造られました。『もろもろの天は神のロゴスによって堅く立てられ、天の万軍は神の霊によって堅く立てられた』とあるからです（詩篇三三・六）。1:7.4 神の知恵は、何よりも力あるものです。『神は知恵をもって地の基をすえ、悟りをもって天を定められた。その知識によって淵はわきいで、雲は露をそそいだ』（箴言三・一九〜二〇）。人よ、清く、敬虔に、正しく生きて、これらのことを悟るなら、あなたは神を見ることができます。1:7.5 しかし、何よりもまず、あなたの心の中で、信仰と神への恐れが先に立てばよいのです。そのとき、あなたはこれらのことを悟るでしょう。あなたが死ぬものを脱ぎ捨て、朽ちないものを着るとき、そのとき、あなたは神をふさわしく見るでしょう（第一コリント一五・五三）。1:7.6 神が、あなたの肉を、魂とともに不死のものとして、よみがえらせてくださるからです。今、神を信じるなら、そのとき、あなたは不死の者となって、不死のかたを見るでしょう。そして、そのとき、自分が不当に神をそしっていたことを知るでしょう。

1:8.1 しかし、あなたは、死者がよみがえることを信じません。そのときが来れば、あなたは、望んでも望まなくても信じるでしょう。そして、今信じないな

ら、そのときのあなたの信仰は、不信仰とみなされるでしょう。それにしても、あなたはなぜ信じないのですか。1:8:2 それとも、信仰がすべての物事に先立つことを、知らないのですか。実際、まず種を地に託さないで、刈り取ることのできる農夫がいるでしょうか。まず自分を船と舵取りに託さないで、海を渡ることのできる人がいるでしょうか。1:8:3 まず自分を医者に託さないで、いやされることのできる病人がいるでしょうか。まず師に自分を任せて信頼しないで、学ぶことのできる技術や知識があるでしょうか。1:8:4 農夫は地を信頼し、船で行く人は船を、病人は医者を信頼します。それなら、あなたは、神からこれほど多くの保証を受けていながら、自分を神に託そうとしないのですか。1:8:5 第一に、神はあなたを、ないものからあるものへと造られました。あなたの父も母もかつてはいなかったのなら、あなたはなおさら、かつてはいなかったからです。1:8:6 また、神は、湿った小さな実体から、ごく小さなしずくから、あなたを形造られました。そのしずくも、かつてはなかったのです。そして、神はあなたを、この世の生へと導き出されました。それでいて、あなたは、人の手で作られた像が神々であり、不思議なわざを行うと信じています。ところが、あなたを造られた神が、後にふたたびあなたを造ることがおできになるとは、信じないのですか。

1:9:1 あなたが拝んでいると言う神々の名は、死んだ人間の名です。しかも、それはだれで、どのような人間でしょうか。クロノスは子を食らう者で、自分の子供たちを食い尽くしていたことがわかるではありませんか。1:9:2 あなたが、クロノスの子ゼウスを挙げるとしても、ゼウスの行いとふるまいもよく調べなさい。第一に、ゼウスはイデの山で山羊に育てられました。そして、神話によれば、その山羊を殺して皮をはぎ、自分の衣を作りました。1:9:3 ゼウスのほかの行いもあります。姉妹と寝たこと、姦淫、少年を汚したことです。それについては、ホメロスやほかの詩人たちが、わたしよりもよく語っています。このうえ、ゼウスの息子たちのことを、わたしが数え上げる必要があるでしょうか。ヘラクレスは自分を焼き、ディオニュソスは酔って狂います。アポロンはアキレウスを恐れて逃げ、ダフネに恋し、ヒュアキントスが死ぬことを知りません。アフロディテは傷を負い、アレスは人間を滅ぼします。そのうえ、神々と呼ばれるこの者たちからは、血が流れるのです。1:9:4 それでも、これらはまだ控えめな話です。オシリスと呼ばれる神が、手足を切り刻まれていたことがわかるのですから。オシリスのためには、毎年秘儀が行われます。オシリスが失われ、見いだされ、手足が一つずつ捜されるかのようにです。オシリスが失われるのかどうかも悟られず、見いだされるのかどうかも示されないからです。1:9:5 アッティスは去勢され、アドニスは森をさまよって狩りをし、猪に傷つけられ、アスクレピオスは雷に打たれます。それを、わたしが語る必要があるでしょうか。シノペからアレキサンデリヤへ逃げてきたサラピスや、スクテヤのアルテミスのことも語る必要があるでしょうか。この女神も逃げてきた者であり、人殺しであり、狩人であって、エンデュミオンに恋をしたのです。1:9:6 これらのことは、わたしたちが言っているのではなく、あなたがたの歴史家や詩人たちが言い広めていることだからです。

第一巻 10〜14章　生き物と像を拝む人々、王を敬うこと、「キリスト者」の名、復活のしるし

1:10:1 エジプト人が拝んでいる生き物の数の多さを、このうえ、わたしが数え上げる必要があるでしょうか。彼らは、這うもの、家畜、獣、鳥、川の泳ぐものを拝み、そのうえ、足洗いの鉢や恥ずべき音まで拝んでいるのです。1:10:2 あなたがギリシヤ人やほかの諸民族を挙げるとしても、彼らは石や木やそのほかの材料を拝んでいます。先に述べたとおり、それは死んだ人間の似姿です。実際、フェイディアスがピサでエリス人のためにオリュンポスのゼウスを造ったことがわかります。また、アテネ人のためにアクロポリスでアテナを造りました。1:10:3 人よ、わたしもあなたに尋ねましょう。ゼウスは何人いることになるでしょうか。実際、ゼウスはまず、オリュンポスのゼウスと呼ばれます。また、ラティアリスのゼウス、カシオスのゼウス、雷のゼウス、父祖のゼウスとも呼ばれます。夜通しのゼウス、町を守るゼウス、カピトリウムのゼウスとも呼ばれます。1:10:4 クロノスの子のゼウスは、クレテ人の王となった者で、クレテに墓があります。ほかのゼウスたちは、おそらく葬られるに値するとさえ認められなかったのでしょう。また、いわゆる神々の母を挙げるとしても、その女神の行いを口に出して語ることなど、わたしには決してあってはなりません。このようなことは、名を口にすることさえ、わたしたちには許されていないからです。その女神に仕えている従者たちの行いを語ることも、同じです。その女神自身と息子たちが、どれほどの税と貢ぎを王に納めているかを語ることも、同じです。1:10:5 それらは神々ではないからです。そうではなく、先に述べたとおり、偶像であり、人の手のわざであり、汚れた悪霊です（詩篇一一五・四、一三五・一五）。これを造る者と、これに望みを置く者とは、これと等しい者になればよいのです（詩篇一一五・八、一三五・一八）。

1:11:1 ですから、わたしはむしろ王を敬います。王を拝むのではなく、王のために祈るのです。しかし、まことに神であり、真実なかたである神を、わたしは拝みます。王がこの神によって王とされたことを知っているからです。1:11:2 では、あなたはわたしに「なぜ王を拝まないのか」と言うでしょう。それは、王が、拝まれるために王とされたのではなく、法にかなう栄誉をもって敬われるために王とされたからです。実際、王は神ではなく、神によって立てられた人間です（ローマ一三・一）。拝まれるためではなく、正しく裁くために立てられたのです。1:11:3 王は、ある意味で、神から治める務めを託されているからです。実際、王自身も、自分の下に立てている者たちが王と呼ばれることを望みません。「王」は王の名であって、ほかの者がそう呼ばれることは許されないからです。同じように、拝まれることも、ただ神だけに許されているのです。1:11:4 ですから、人よ、あなたはあらゆる点で迷っています。王のほうは、王に好意を寄せ、王に従い、王のために祈って、敬いなさい。そうするなら、あなたは神のみこころを行うことになるからです。1:11:5 実際、神の律法はこう言っています。『わが子よ、神と王とを敬え。そのいずれにも不従順であってはならない。神と王とは、たちまち自分たちの敵を罰するからである』（箴言二四・二一〜二二）。

1:12:1 あなたは、わたしをキリスト者と呼んで笑います。しかし、あなたは、自分が何を言っているのかわかっていません。第一に、油を塗られたもの[1]は、快く、役に立つものであって、笑われるようなものではありません。実際、まず油を塗られなければ、役に立ち、無事でいられる船があるでしょうか。1:12:2 それとも、油を塗られていないのに、形が美しく、役に立つ塔や家があるでしょうか。この世に生まれてくるときや、競技をするときに、油を塗られない人がいるでしょうか。1:12:3 また、油を塗られ、磨かれなければ、美しさを持つことのできる細工物や飾りがあるでしょうか。さらに、空気と天の下の全地も、ある意味で、光と霊によって油を塗られています。1:12:4 それなのに、あなたは神の油を塗られることを望まないのですか。ですから、わたしたちは、このためにキリスト者と呼ばれるのです。神の油を塗られているからです。

1:13:1 また、あなたは、死者がよみがえることを否定しています。実際、あなたはこう言います。「死者の中からよみがえった人を、ひとりでいいから見せなさい。見て信じるから」。第一に、起こったことを見てから信じるとしても、それのどこが大したことでしょうか。1:13:2 次に、あなたは、自分を焼いたヘラクレスが生きていて、雷に打たれたアスクレピオスがよみがえったと信じています。それなのに、神によってあなたに語られていることは信じないのですか。おそらく、わたしは、死者の中からよみがえって生きている人をも、あなたに示すでしょう。そして、あなたはそれも信じないでしょう。1:13:3 さて、神はあなたに、ご自分を信じさせるために、多くの証拠を示しておられます。実際、あなたが望むなら、季節と昼と夜の終わりをよく見なさい。それらもまた、どのように終わり、ふたたびよみがえるかを見なさい。1:13:4 また、種と実に起こる復活もあるではありませんか。しかも、それは人が用いるためなのです。実際、たとえば、一粒の麦やほかの種は、地に投げ入れられると、まず死んで崩れ、それからよみがえって穂になります（ヨハネ一二・二四、第一コリント一五・三六〜三七）。1:13:5 木や果樹の性質はどうでしょうか。神の命令によって、隠れた見えないところから、時に応じて実を出すではありませんか。さらに、ときには、すずめやほかの鳥が、りんごやいちじくやほかの木の種を飲み込みます。そして、岩だらけの丘や墓の上に来て、ふんを落とします。すると、かつて飲み込まれ、あれほどの熱の中を通り抜けたその種が、根を張り、木となって生え出ます。1:13:6 すべてこれらのものは、神の知恵の働きです（第一コリント一二・一一）。これらによっても、神がすべての人間を残らず復活させることがおできになると示すためです。1:13:7 復活の証明として起こる、もっと驚くべき光景を見たいのなら、それは地上の事柄だけでなく、天にある事柄にもあります。月が毎月よみがえるのを、よく見なさい。月は欠け、死に、ふたたびよみがえるのです。1:13:8 人よ、さらに聞きなさい。あなたは知らなくても、あなた自身の中にも復活のわざが起こっているのです。実際、あなたはおそらく、かつて病気にかかって、肉と力と容姿を失ったことがあるでしょう。そして、神からあわれみといやしを受けて、ふたたび体と容姿と力を取り戻したでしょう。あなたは、見えなくなった肉がどこへ行ったのかを知りませんでした。それと同じように、肉がどこから生じ、どこから来たのかも、あなたにはわかりません。1:13:9 しかし、あなたは「食べ物と、血に変わる体液からだ」と言うでしょう。そのとおりです。しかし、それもまた神のわざです。そのようにお造りになった神のわざであって、ほかのだれのわざでもありません。

1:14:1 ですから、信じないでいてはなりません。そうではなく、信じなさい。実際、わたしも、これが起こるとは信じていませんでした。しかし今は、これらのことをよく見て、信じています。同時に、聖なる預言者たちの聖なる書物に出会ったからでもあります。預言者たちは、神の霊によって、過去のことがどのように起こったかを預言しました。今のことがどのように起こっているか、来るべきことがどのような順序で成し遂げられるかも、預言しました。1:14:2 ですから、わたしは、前もって告げられていたことが起こっているという証明を得ました。それで、信じないのではなく、神に聞き従って信じています。あなたも、望むなら、この神を信じて、この神に従いなさい。今信じないで、そのとき、永遠の刑罰の中で苦しみながら信じるようになることのないためです。1:14:3 この刑罰は、預言者たちが前もって告げていたものです。詩人や哲学者たちは、預言者たちより後に現れて、聖なる書物からそれを盗みました。自分たちの教えを信用させるためです。とはいえ、彼ら自身も、不敬虔な者たちと信じない者たちに下ることになっている罰について、前もって語りました。それがすべての人への証しとなって、ある人々が「わたしたちは聞いたこともなく、知りもしなかった」と言うことのないためです。1:14:4 あなたも、望むなら、預言者たちの書物を熱心に読みなさい。それらの書物が、もっとはっきりとあなたを導くでしょう。あなたが永遠の罰を逃れ、神の永遠の善いものを得るようにです。1:14:5 話すために口をお授けになり、聞くために耳を形造られ、見るために目を造られたかたが、すべてのことをお調べになり、正しくお裁きになるからです（出エジプト四・一一、詩篇九四・九）。そのかたは、おのおのに、その人にふさわしい報いをお与えになります（ローマ二・六）。1:14:6 耐え忍んで善いわざを行い、朽ちないものを求める人々には、永遠のいのちをお与えになります（ローマ二・七）。喜び、平和、安息、そして多くの善いものもお与えになります。それは、目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったものです（第一コリン

ト二・九）。しかし、信じない者たち、侮る者たち、真理に従わないで不義に従う者たちもいます。その者たちが、姦淫、不品行、男色、貪欲、忌まわしい偶像礼拝にまみれるなら、怒りと激しい憤り、患難と苦悩が臨みます（ローマ二・八〜九、第一コリント六・九〜一〇）。そして、ついには、永遠の火がそのような者たちを捕らえて離さないでしょう。1:14:7 友よ、あなたは「あなたの神を見せなさい」と付け加えました。この神こそ、わたしの神です。わたしは、あなたがこの神を恐れ、この神を信じるように勧めます。

訳注

1 最古の写本は、『クリストン』と音の近い『クレーストン（良いもの）』と書く。

第二巻 1〜4章　この書を書く理由、生まれる神々、哲学者たちの神

2:1:1 いとも善良なアウトリュコスよ、先日、わたしたちは語り合いました。あなたは、わたしの神はだれかと尋ね、しばらくのあいだ、わたしたちの話に耳を貸してくれました。そこで、わたしは、自分の神への敬いについて、あなたに説き明かしました。そのうえ、わたしたちは別れのあいさつを交わし、大いに親しみ合って、それぞれ自分の家に帰りました。もっとも、あなたは初め、わたしたちに対して頑なでした。あなた自身が知っていて、覚えているとおり、わたしたちの言葉を愚かなことだと思ったからです。2:1:2 その後、あなたはわたしに勧めました。わたしは弁舌はつたないのです（第二コリント一一・六）。それでも、その勧めに応えて、今また、この書物によって、あなたにもっと詳しく示したいと思います。あなたがとらわれている、むなしい骨折りとむなしい宗教のことです。同時に、あなたがたの歴史書のいくつかによって、真理をあなたに明らかにしたいと思います。あなたはそれらを読んではいても、おそらくまだ知ってはいないからです。

2:2:1 実際、わたしには、笑うべきことに思えます。石工や塑像師、画家や鋳物師が、形造り、描き、彫り、鋳て、神々をこしらえます。それらは、職人たちの手でできあがったときには、何とも思われません。ところが、だれかに買われ、神殿と呼ばれるところや、どこかの家に奉納されたとします。すると、買った者たちがそれにいけにえをささげるだけではありません。造った者たちや売った者たちまでもが、いけにえと注ぎの供え物を整えて、熱心にやって来ます。それを拝むためです。そして、それを神々とみなします。それらが、自分たちが造ったときのまま、すなわち石か青銅か木か絵の具、あるいはほかの何かの材料であることを知らないのです。2:2:2 まさにこれと同じことが、いわゆる神々の歴史と系譜を読んでいるあなたがたにも起こっています。実際、あなたがたは、彼らの誕生の話を読むときには、彼らを人間だと考えます。しかし後になると、彼らを神々と呼び、彼らに仕えます。彼らが、生まれたと読んだとおりの者として生まれたのだということに、心を留めもせず、悟りもしないのです。

2:3:1 また、昔の神々については、本当に生まれていたのなら、多くの誕生が見られました。しかし今、神々の誕生がどこに示されているでしょうか。実際、もし昔は子を生み、生まれていたのなら、今に至るまで、生まれる神々が出てこなければならなかったのは明らかです。そうでなければ、そのような神々は弱いものと思われるでしょう。神々は年老いたので、もう子を生まないか、死んで、もういないかのどちらかだからです。2:3:2 実際、もし神々が生まれていたのなら、今に至るまで生まれていなければならなかったはずです。人間も同じように生まれているからです。むしろ、神々は人間よりも多くなければならなかったはずです。シビュラが言うとおりです。『もし神々が子を生み、しかも不死のままでいるなら、生まれた神々は人間よりも多くなっていただろう。死すべき者たちが立つ場所さえ、決してなかったであろう』。2:3:3 実際、死すべき、短命な人間にさえ、今に至るまで、生まれてくる子供たちが見られます。人間が生まれなくなることもありません。そのため、町や村は人で満ち、さらに地方にも人が住んでいます。それなら、詩人たちによれば死なない神々は、なおさら子を生み、生まれなければならなかったのではありませんか。あなたがたは、神々の誕生があったと言っているのですから。2:3:4 また、なぜ、昔はオリュンポスと呼ばれる山に神々が住んでいたのに、今は人けがないのですか。あるいは、ゼウスは、ホメロスやほかの詩人たちによれば、昔はイデに住み、そこに住んでいると知られていました。それなのに、なぜ今は知られていないのですか。2:3:5 また、なぜゼウスはどこにでもいたのではなく、地の一部にいたのですか。実際、ほかのところをなおざりにしていたか、どこにでもいて、すべてのものに心を配ることができなかったかの、どちらかです。2:3:6 たとえば、東の地にいたなら、西の地にはいなかったからです。逆にまた、西の地方にいたなら、東の地方にはいませんでし

た。しかし、いと高く全能の神、まことに神である神は、どこにでもおられるだけではありません。すべてをご覧になり、すべてをお聞きになり、さらに、場所の中に収められることもないのです。そうでなければ、神を収める場所のほうが、神より大きいことになるでしょう。収めるものは、収められるものより大きいからです。実際、神は収められるのではなく、ご自身が万物の場所なのです。2:3:7 また、なぜゼウスはイデを去ったのですか。死んだからですか。それとも、あの山がもう気に入らなくなったからですか。また、どこへ行ったのですか。天へですか。2:3:8 違います。そうではなく、あなたは「クレテへ」と言うでしょうか。そのとおりです。そこには、今に至るまで、ゼウスの墓が示されています。また、あなたは「ピサへ」と言うでしょう。そこのゼウスは、今に至るまでフェイディアスの手わざを名高くしています。では、哲学者や詩人たちの書いたものに進みましょう。

2:4:1 ストア派のある人々は、神がいることさえまったく否定します。あるいは、神がいるとしても、神は自分のほかの何ものにも心を配らないと言います。これらは、まったくのところ、エピクロスとクリュシッポスの愚かさが言い表したものです。ほかの人々は、万物はひとりでに生じたと言い、世界は生じたものではなく、永遠の自然であると言います。そもそも神の摂理はないと、あえて言い放ちました。そうではなく、ただ各人の良心だけが神であると言います。2:4:2 さらにほかの人々は、全体に行き渡っている霊が神であると説きます。プラトンとその学派の人々は、神は生じたかたではなく、万物の父であり造り主であると認めます。しかしその後、神と並んで、生じたものではない物質を想定し、物質は神と同じだけ古くからあると言います。2:4:3 しかし、神も物質も生じたものではないなら、プラトン派の人々によれば、神はもはや万物の造り主ではありません。また、彼らの言うかぎりでは、神のひとりの支配も示されません。2:4:4 さらに、神は生じたかたではないので、変わることもないかたです。それと同じように、もし物質も生じたものでなかったのなら、物質もまた変わることがなく、神に等しかったはずです。生じたものは移ろい、変わるものであり、生じたものではないものは移ろわず、変わらないものだからです。2:4:5 神が、すでにある物質から世界をお造りになったのなら、それのどこが大したことでしょうか。実際、人間の職人でさえ、だれかから材料を受け取れば、それを使って望むものを何でも造ります。2:4:6 しかし、神の力は、存在しないものから、お望みのものを何でもお造りになることのうちに現れます。同じように、魂と動きを与えることも、ほかのだれのわざでもなく、ただ神だけのわざです。2:4:7 実際、人間は像を造りはします。しかし、自分の造ったものに、理性と息、あるいは感覚を与えることはできません。一方、神は、これにまさるものとして、理性を持ち、息をし、感覚を持つものをお造りになる力をお持ちです。2:4:8 ですから、これらすべての点で、神は人間より力あるかたです。存在しないものから存在するものをお造りになること、また、お造りになったことにおいても、同じです。しかも、お望みのものを、お望みのとおりにお造りになるのです。

第二巻 5〜7章　詩人たちの語る神々の誕生、ギリシャの神話と王家の系図

2:5:1 ですから、哲学者たちや歴史家たちの考えは、互いに食い違っています。実際、彼らはこのように言い表しました。ところが、詩人ホメロスは、別の前提に立って、誕生のことを持ち込んでいることがわかります。世界の誕生だけではありません。神々の誕生もです。2:5:2 実際、彼はどこかでこう言っています。『神々の起こりであるオケアノスと、母テテュスを。そこから、すべての川とすべての海が出る』。こう言うことで、彼はもはや神を示してはいません。2:5:3 実際、オケアノスが水であることを、知らない人がいるでしょうか。水であるなら、神ではないことになります。一方、神が、実際そうであるとおり、万物の造り主であるなら、神は水と海の創造者でもあることになります。2:5:4 ヘシオドスもまた、神々の誕生だけを語ったのではありません。世界そのものの誕生も語りました。そして、世界は生じたものだと言いながら、だれによって生じたのかを言うことはできませんでした。2:5:5 さらに、彼はクロノスと、その子ゼウス、またポセイドンとプルトンを神々と呼びました。そして、これらの神々が世界より後に生まれたことがわかります。さらに彼は、クロノスが自分の子ゼウスに攻められたことも物語ります。2:5:6 実際、彼はこう言っています。『父クロノスを力で打ち負かし、不死の者たちに、一つ一つを等しく、よく割り当て、誉れを定めた』。それから彼は、ゼウスの娘たちのことを続けて語ります。彼はこの娘たちをムーサたちとも呼びます。彼は、万物がどのようにして生じたのかを彼女たちから学ぼうとして、彼女たちに願い求めていることがわかります。2:5:7 実際、彼はこう言います。『ゼウスの子らよ、幸いあれ。心をそそる歌を授けよ。常にいる、祝福された不死の者たちの族をたたえよ。彼らは、地と、星をちりばめた天と、暗い夜から生まれ、塩辛い海が育てた者たちである。2:5:8 語れ。初めに、神々と大地がどのように生まれたかを。また、川と、果てしなくうねりたける海と、輝く星々と、上に広がる天が、どのように生まれたかを。また、彼らがどのように富を分け合い、誉れを分け合ったかを。さらに、初めにどのようにして、多くの谷のあるオリュンポスを手に入れたかを。2:5:9 オリュンポスの館に住むムーサたちよ、これらのことを、初めからわたしに語れ。それらのうち、何が最初に生まれたかを言え』。しかし、ムーサたちは世界より後に生まれたのに、どうしてこれらのことを知っていたのでしょうか。2:5:10 あるいは、彼女たちの父がまだ生まれていなかったのに、どうしてヘシオドスに物語ることができたのでしょうか。

2:6:1 たしかに、彼はある仕方で、物質と世界の造成を想定しています。こう言うのです。『まことに、まず最初にカオスが生じた。次に、胸の広い大地が生じた。雪をいただくオリュンポスの頂に住む、すべての不死の者たちの、いつまでも揺るがない座である。また、道の広い大地の奥所である、霧深いタルタロスも。また、不死の神々の中で最も美しいエロスも。彼は手足の力を解き、すべての神々とすべての人間の、胸の内の知性と思慮深い考えを打ち負かす。2:6:2 カオスからは、エレボスと黒い夜が生まれた。大地はまず、自分と等しい、星をちりばめた天を生んだ。天が大地をすっかり覆い、祝福された神々の、いつまでも揺るがない座となるためである。また、大地は高い山々を生んだ。谷の多い山々に住むニンフたち、女神たちの、心地よいすみかである。大地はまた、心をそそる愛の交わりなしに、うねりたける実りのない大海、ポントスを生んだ。そしてその後、天と床を共にして、深い渦の巻くオケアノスを生んだ』。2:6:3 彼はこう言いながら、それでも、これらがだれによって生じたのかを明らかにしていません。実際、もし初めにカオスがあり、生じたものではない何かの物質が前もって存在していたとします。それなら、いったいだれが、それを作り変え、整え直し、形を変えたのでしょうか。2:6:4 物質が、自分で自分の形を変え、整えていたのでしょうか。実際、ゼウスはずっと後に生まれました。物質より後であるだけではありません。世界よりも、多くの人間よりも後です。さらに、その父クロノスも同じです。2:6:5 それとも、むしろ、物質をお造りになった、主たる何かが

あったのでしょうか。わたしが言うのは神のことです。神は、物質を美しく整えもなさったのです。さらに、ヘシオドスはあらゆる点でたわごとを言い、自分と食い違うことを言っていることがわかります。2:6:6 実際、彼は、地と天と海を挙げておいて、それらから神々が生まれたことにしようとします。また、それらから、神々の親族である、ひどく恐ろしい何人かの人間が出たと告げます。ティタンたちの族、キュクロプスたち、巨人たちの群れ、そしてエジプトの悪霊たち、あるいは、むしろむなしい人間たちです。このことは、ホラピオスとも呼ばれたアポロニデスが、『セメヌーティ』と題する書と、彼のほかの歴史書で記しています。それらは、エジプトの宗教とその王たちについての書です。

2:7:1 また、ギリシャ人の神話と、その中のむなしい骨折りを、わたしが語る必要があるでしょうか。闇の王であるプルトンのことや、海の下に潜り、メラニッペを抱いて、人を食う子をもうけたポセイドンのことです。あるいは、ゼウスの子らについて、歴史家たちがどれほど多くの悲劇に仕立てたかを、語る必要があるでしょうか。2:7:2 これらの者は、神々ではなく人間として生まれました。だからこそ、歴史家たち自身が、彼らの系図を数え上げているのです。また、喜劇作者アリストファネスは、『鳥』と題する作品で、世界の造成について論じようとしました。そして、初めに卵が生じ、それが世界の成り立ちとなったと言いました。こう言うのです。『黒い翼のものが、まず卵を産んで』。2:7:3 さらに、サテュロスも、アレキサンデリヤの人々の区のことを物語っています。彼は、プトレマイオスとも呼ばれたフィロパトルから始めて、この王の家祖はディオニュソスであったと告げています。そのため、プトレマイオスは、その部族を第一の部族として定めました。2:7:4 そこで、サテュロスはこう言います。ディオニュソスと、テスティオスの娘アルタイアから、デイアネイラが生まれました。デイアネイラとゼウスの子ヘラクレスから、ヒュロスが生まれました。ヒュロスの子はクレオデモス、その子はアリストマコス、その子はテメノス、その子はケイソスです。その子はマロン、その子はテスティオス、その子はアコオス、その子はアリストミダス、その子はカラノスです。その子はコイノス、その子はテュリンマス、その子はペルディッカス、その子はフィリッポス、その子はアエロポスです。その子はアルケタス、その子はアミュンタス、その子はボクロス、その子はメレアグロス、その子はアルシノエです。アルシノエとラゴスから、ソテルとも呼ばれるプトレマイオスが生まれました。その子とベレニケから、プトレマイオス・フィラデルフォスが生まれました。その子とアルシノエから、プトレマイオス・エウエルゲテスが生まれました。その子と、クレネで王であったマガスの娘ベレニケから、プトレマイオス・フィロパトルが生まれました。2:7:5 つまり、アレキサンデリヤで王となった者たちとディオニュソスとの血縁は、このようになっています。そのため、ディオニュソスの部族の中にも、区が分けられています。アルタイス区は、ディオニュソスの妻となった、テスティオスの娘アルタイアから。デイアネイリス区は、ディオニュソスとアルタイアの娘で、ヘラクレスの妻であるデイアネイラからです。2:7:6 そのため、彼らの区も、その呼び名を持っています。アリアドニス区は、ミノスの娘で、ディオニュソスの妻であり、父を愛する娘であったアリアドネから。彼女は、船乗りの姿をしたディオニュソスと交わりました。テスティス区は、アルタイアの父テスティオスから。トアンティス区は、ディオニュソスの子トアスから。スタフュリス区は、ディオニュソスの息子スタフュロスから。エウアイニス区は、ディオニュソスの息子エウノオスから。マロニス区は、アリアドネとディオニュソスの息子マロンからです。2:7:7 これらの者はみな、ディオニュソスの息子だからです。さらに、ほかにも多くの呼び名が生じ、今に至るまで残っています。ヘラクレスからはヘラクレイダイと呼ばれる者たちが、アポロンからはアポロニダイとアポロニオイが生じました。また、ポセイドンからはポセイドニオイ、ゼウスからはディオイとディオゲナイです。

第二巻 8〜10章　詩人たちの食い違い、預言者たちの教える創造と口ゴス

2:8:1 また、このような名前と系図の数々を、これ以上わたしが数え上げる必要があるでしょうか。ですから、歴史家たちはみな、また詩人や哲学者と呼ばれる者たちも、あらゆる仕方で戯れているのです。さらに、彼らに耳を傾ける者たちもです。実際、彼らが自分たちの神々について書き連ねたのは、むしろ作り話と愚かな話でした。彼らは、その神々を、神々としてではなく、人間として示したからです。ある者は酒に酔う者、ほかの者はみだらな者や人殺しでした。2:8:2 それればかりか、世界の誕生についても、彼らは互いに食い違う、くだらないことを言い表しました。まず、ある人々は、先にも示したとおり、世界は生じたものではないと唱えました。そして、世界は生じたものではなく、永遠の自然であると言う人々がいます。彼らは、世界は生じたものだと説いた人々と、つじつまの合わないことを言いました。2:8:3 彼らはこれらのことを、推測と人間の考えによって口にしたのであって、真理に従って語ったのではないからです。また、ほかの人々は摂理があると言いましたが、さらに別の人々がその説を崩しました。さて、アラトスはこう言います。『ゼウスから始めよう。わたしたち人間が、決して口にせずにおくことのない神から。すべての道はゼウスに満ち、人間のすべての広場も満ちている。海も港も満ちている。わたしたちはみな、どこにいてもゼウスを必要としている。2:8:4 わたしたちもまた、ゼウスの族だからである。ゼウスは人間に優しく、よいしるしを示し、暮らしの糧を思い起こさせて、人々を仕事へと起こす。土が牛にも鍬にも最もよいときを告げ、木を植える穴を掘り、あらゆる種をまくのによい季節を告げる』。2:8:5 では、わたしたちはだれを信じればよいのでしょうか。アラトスでしょうか。それとも、こう言うソフォクレスでしょうか。『何ごとについても、〔確かな〕[1]摂理はない。できるかぎり、成り行きまかせに生きるのが最もよい』。ところが、ホメロスはまた、このソフォクレスと調子が合いません。2:8:6 実際、ホメロスはこう言います。『ゼウスは人々の徳を、増しもし、減らしもする』。また、シモニデスも言います。『神々なしに徳を得た者はいない。町も、死すべき者も。神こそ、すべてに知恵ある者。それらのうちに、災いを受けないものは何もない』。2:8:7 同じように、エウリピデスも言います。『人間には、神なしには何もない』。また、メナンドロスも言います。『それなら、わたしたちに心を配る者は、ただ神のほかにはだれもいない』。また、エウリピデスは再びこう言います。『実際、神が救おうと思うときには、救いへの多くのきっかけを与える』。2:8:8 また、〔テスティオス〕[2]も言います。『神が望めば、あなたは救われる。たとえ、編んだむしろに乗って海を行くとしても』。彼らは、このようなことを無数に語りながら、自分自身と食い違うことを言い表しました。少なくともソフォクレスは、別の所では摂理がないと言いながら、こうも言っています。『神の打撃を、死すべき者は跳び越えられない』。2:8:9 そればかりか、彼らは多くの神々を持ち込み、あるいは、ひとりの支配を言いもしました。また、摂理があると言う人々に対して、摂理はないという反対のことを語りました。そのため、エウリピデスは認めて、こう言います。『わたしたちは望みに駆られて、多くのことに励む。むなしく労苦を重ね、何も知らずに』。2:8:10 彼らは、望まずとも、真理を知らないことを認めています。彼らは悪霊に吹き込まれ、悪霊に思い上がらされて、語ったことを悪霊によって語ったのです。実際、詩人のホメロスやヘシオドスは、言われるところではムーサたちに吹き込まれて、思い込みと迷いによって語りました。清い霊によってではなく、迷わせる霊によってです。2:8:11 そのことは、次のことからはっきりと示されます。悪霊につかれた者たちは、今に至るまで、ときどき、まことの神の御名によって悪霊を追い出してもらいます。そのとき、迷わせる霊たち自身が、自分たちは悪霊であると認めるのです。かつて詩人たちに働いたのも、この悪霊たちでした。ただし、ときには、詩人たちのうちのある者が、魂が酔いからさめて、預言者たちと一致することを語りました。神のひとりの支配と裁きと、そのほか彼

らが語ったことについてです。それは、彼ら自身とすべての人間への証しとなるためでした。

2:9:1 しかし、神の人々は、聖霊を宿す者となり、預言者となりました。彼らは、神ご自身に吹き込まれ、知恵を授けられて、神に教えられた者、敬虔な者、正しい者となりました。そのため、彼らは、神の器となって神からの知恵を受け入れるという、この報いにあずかる者とされました。その知恵によって、彼らは世界の創造とほかのすべてのことについても語りました。2:9:2 実際、彼らは疫病と飢饉と戦争についても予告しました。しかも、ヘブル人のもとには、ひとりやふたりではなく、もっと多くの者が、時と時期に応じて現れました。それだけでなく、ギリシヤ人のもとにもシビュラが現れました。彼らはみな、互いに親しく調和したことを語りました。彼らより前に起こったこと、彼らの時代に起こったこと、わたしたちの時代に今成就しつつあることです。そのため、わたしたちは、来るべきことについても確信しています。初めのことが成し遂げられたとおりに、そのようになるのです。

2:10:1 まず第一に、預言者たちは声をそろえて、わたしたちに教えました。神は存在しないものから万物をお造りになった、ということです。神と同じだけ古いものは何もないからです。そうではなく、神は、ご自身がご自身の場所であり、何も必要となさらず、世々の前からおられて、人間を造ろうと望まれました。その人間に知られるためです。そこで、神はこの人間のために、世界を前もって備えられたのです。2:10:2 生じたものは何かを必要としますが、生じたかたではないかたは、何ものも必要となさらないからです。そこで、神は、ご自分のロゴスを、ご自分の内奥に宿るものとして持っておられました。そして、万物より前に、ご自分の知恵とともにロゴスを外へとお発しになって、お生みになりました。2:10:3 神は、このロゴスを、ご自分によって生じたものをお造りになるときの助け手とされ、このロゴスによって万物を造られました。このかたは「初め」と呼ばれます。ご自分によって造られたすべてのものをお治めになり、支配なさるからです。2:10:4 そこで、このかたは、神の霊であり、初めであり、知恵であり、いと高きかたの力です。このかたが、預言者たちのうちに下って来られ、彼らを通して、世界の創造とほかのすべてのことを語っておられました。2:10:5 世界が造られていたとき、預言者たちがいたのではないからです。そうではなく、いたのは、神の内にある神の知恵と、いつも神とともにおられる、神の聖なるロゴスでした。2:10:6 だからこそ、知恵は、預言者ソロモンを通しても、こう言っています。『彼が天を備えられたとき、わたしは彼とともにいた。彼が地の基を堅く据えられたとき、わたしはそのかたわらにあって、整えていた』（箴言八・二七、二九～三〇）。2:10:7 また、ソロモンより何年も前に生まれたモーセは、こう言います。いや、むしろ、神のロゴスが、器を通すようにモーセを通して、こう言われます。『はじめに神は天と地とを創造された』（創世記一・一）。2:10:8 ここでは、まず『初め』と『創造』が名づけられ、そのうえで神が示されています。神の名を、いいかげんに、むなしく口にすべきではないからです。実際、神の知恵は、ある人々がたわごとを言い、存在しない神々を数多く名づけるようになることを、前もって知っていました。2:10:9 そこで、こう言っておられるのです。『はじめに神は天と地とを創造された』（創世記一・一）。まことの神が、わざによって知られるためです。また、神がご自分のロゴスにおいて、天と地とその中にあるものを造られたことが、知られるためです。2:10:10 それから、それらの創造をお語りになって、わたしたちにお示しになります。『地は見えず、整えられていなかった。やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてを動いていた』（創世記一・二）。2:10:11 聖書は、まず初めに、これらのことを教えています。ある仕方で、物質が生じたものであり、神によって生じたものであることを教えるのです。神は、その物質から世界をお造りになり、仕上げられました。

訳注

1 この語は写本になく、ソフォクレスの本文から補ったもの。
2 この名は後の書き込みとする説がある。句はエウリピデスのものとされる。

第二巻 11〜12章　六日のわざと第七日

2:11:1 創造の初めは光です。整えられていくものを、光が明らかにするからです。そのため、聖書はこう言います。『神は「光あれ」と言われた。〔すると光があった。神はその光を見て、良しとされた〕[1]』（創世記一・三〜四）。明らかに、光は人間にとって良いものとして生じたのです。2:11:2 『そして、光とやみとを分けられた。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日である。2:11:3 神はまた言われた、「水の間におおぞらがあって、水と水とを分けよ」。そのようになった。神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた。2:11:4 神はそのおおぞらを天と名づけられた。神は見て、良しとされた。夕となり、また朝となった。第二日である。神はまた言われた、「天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ」。2:11:5 そのようになった。水はその集まる所に集まり、かわいた地が現れた。神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。2:11:6 神は見て、良しとされた。神はまた言われた、「地は、種類にしたがい、似た姿にしたがって種を生じる青草と、実を結ぶ果樹とをはえさせよ。果樹の種は、その中にあって、似た姿にしたがう」。2:11:7 そのようになった。地は、種類にしたがって種を生じる青草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果樹とを、地の上にはえさせた。2:11:8 神は見て、良しとされた。夕となり、また朝となった。第三日である。神はまた言われた、「天のおおぞらに光があって、地の上を照らし、昼と夜とを分けよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためになれ。天のおおぞらにあって地の上を照らす光となれ」。2:11:9 そのようになった。神は二つの大きな光を造り、大きい光に昼をつかさどらせ、小さい光に夜をつかさどらせ、また星を造られた。神はこれらを天のおおぞらに置かれた。地の上を照らし、昼と夜とをつかさどり、光とやみとを分けるためである。2:11:10 神は見て、良しとされた。夕となり、また朝となった。第四日である。神はまた言われた、「水は、這う生き物と、地の上を天のおおぞらに沿って飛ぶ鳥とを生み出せ」。2:11:11 そのようになった。神は、海の大いなる獣と、水が種類にしたがって生み出した這う生き物のすべてとを造られた。また、翼のあるすべての鳥を、種類にしたがって造られた。2:11:12 神は見て、良しとされた。神はこれらを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、海の水に満ちよ。また、鳥は地にふえよ」。2:11:13 夕となり、また朝となった。第五日である。神はまた言われた、「地は生き物を種類にしたがっていだせ。四つ足のものと、這うものと、地の獣とを種類にしたがっていだせ」。2:11:14 そのようになった。神は地の獣を種類にしたがい、家畜を種類にしたがって造り、また地に這うすべてのものを造られた。神は見て、良しとされた。2:11:15 神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう。そして、彼らに海の魚と、空の鳥と、家畜と、全地と、地の上を這うすべてのものとを治めさせよう」。2:11:16 神は人を造られた。神のかたちに彼を造り、男と女とに彼らを造られた。神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また、海の魚と、空の鳥と、すべての家畜と、全地と、地の上を這うすべてのものとを治めよ」。2:11:17 神はまた言われた、「見よ、わたしは、全地のおもてにある、種をもち種を生じるすべての草を、あなたがたに与えた。また、まくための種のある実を結ぶすべての木も与えた。これはあなたがたの食物となる。また、地のすべての獣と、空のすべての鳥と、地の上を這うすべてのもの、すなわちいのちの息を持つものには、2:11:18 食物としてすべての青草を与えた」。そのようになった。神が、お造りになったすべてのものを見られると、見よ、それははなはだ良かった。夕となり、また朝となった。第六日である。2:11:19 こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第六日に、お造りになったわざを終えられた。そして第七日に、お造りになったすべてのわざをやめて休まれた。2:11:20 神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、造り始められたすべてのわざをやめて休まれたからである』（創世記一・四〜二・三）。

2:12:1 さて、六日のわざの説き明かしと、そこにある計らいのすべてを、ふさわしく語り尽くせる人は、だれもいません。たとえ一万の口と一万の舌を持っていたとしてもです。いや、だれかがこの世に身を置いて一万年生きたとしても、なお、これらについて何かをふさわしく語ることはできません。先に書かれた六日のわざのうちにある、神の知恵の、並はずれた偉大さと富のためです。2:12:2 たしかに、歴史家の多くが、これをまねて、これらのことについて物語を作ろうとしました。彼らは、世界の創造について、あるいは人間の本性について、ここから手がかりを得てはいたのです。それでも、真理にふさわしいことは何一つ、ほんのかすかな火花ほども語り出しませんでした。2:12:3 また、哲学者や歴史家や詩人たちの語ったことは、言い回しで飾り立てられているため、信頼に足るものに見えます。しかし、彼らの言葉は、愚かでむなしいことが明らかになります。彼らのたわごとはおびただしいのに、真理は、ほんのわずかさえ彼らのうちに見いだされないからです。2:12:4 実際、彼らによって何か真実なことが語られたように見えても、それは迷いと混ぜ合わされています。ちょうど、何かの毒薬が蜜やぶどう酒やほかの何かに混ぜられると、全体を害のある、役に立たないものにするのと同じです。そのように、彼らの多弁も、むなしい骨折りであり、むしろ、それに聞き従う人々にとって害であることがわかります。2:12:5 さらに、彼らは第七日についても語ろうとしました。この日を、すべての人がその名で呼びますが、たいていの人は、その意味を知りません。ヘブル人のもとで『安息日』と呼ばれるものは、ギリシア語では『第七日』と訳されるのです。この日は、あらゆる民族のあいだでその名で呼ばれていますが、なぜそう呼ぶのか、人々は知らないのです。2:12:6 また、詩人ヘシオドスは、カオスからエレボスと大地と、彼の言う神々と人間を支配するエロスとが生じたと言います。しかし、その言葉は、むなしく、つまらなく、あらゆる真理と無縁であることが明らかになります。神が快楽に打ち負かされるのは、ふさわしくないからです。慎み深い人間でさえ、あらゆる恥ずべき快楽と悪い欲望から身を遠ざけているほどなのです。

訳注

1 この二文は写本になく、後の刊本が補ったもの。

第二巻 13〜15章　天地のはじめ、海と島、光るもの

2:13:1 さらに、ヘシオドスは、地上のもの、つまり下のほうから始めて、生じたものの創造を語っています。その考えは、神を思うものとしては、人間的で、卑しく、まったく弱いものです。2:13:2 人間は下にいるので、地から建て始めるからです。土台を据えなければ、順序どおりに屋根を造ることもできません。しかし、神の力は、次のことに示されます。まず、存在しないものから、生じるものをお造りになることです。しかも、お望みのとおりにお造りになることです。2:13:3 『人にはできない事も、神にはできる』からです（ルカ一八・二七）。そのため、預言者も、まず天が造られたと語りました。天は屋根の役を担うものとして生じたのです。彼はこう言います。『はじめに神は天を創造された』（創世記一・一）。つまり、「初め」によって天が生じたということです。これは先に示したとおりです。2:13:4 また、預言者は、地とは、いわば床であり土台であるものを言っています。淵とは、水の多さを言っています。やみと言うのは、神によって生じた天が、ふたのように、水を地とともに覆っていたからです。水の上を動いていた霊とは、神が被造物に、いのちを生み出すためにお与えになったものです。ちょうど、人間に魂をお与えになったのと同じです。神は、微細なものに微細なものをお混ぜになりました（霊も微細で、水も微細だからです）。霊が水を養い、水が霊とともに至るところに行き渡って、被造物を養うためです。2:13:5 ただ一つのその霊は、光のかたちを帯びて、水と天のあいだに立っていました。やみが、神により近い天と、何らかの仕方で交わることのないためです。神が『光あれ』と言われる前のことです（創世記一・三）。2:13:6 さて、天は丸天井のようなもので、土くれに似た物質を包み込んでいました。実際、イザヤという名の別の預言者も、天について、こう言っています。『これこそ、天を丸天井のようにお造りになり、住むべき天幕のように張られた神である』（イザヤ四〇・二二）。2:13:7 つまり、神の命令、すなわち神のロゴスが、閉じられた部屋の中のともしびのように輝かれて、天の下をお照らしになったのです。光を、世界とは別にお造りになってからのことです。2:13:8 そして、神は光を昼と、やみを夜と呼ばれました（創世記一・五）。人間が自分で、光を昼と、やみを夜と呼べたはずはないからです。いや、ほかのものも呼べなかったでしょう。それらをお造りになった神から、名づけを受けていなかったならばです。2:13:9 さて、物語の、つまり世界の生成の最初の主題のところで、聖書が語っているのは、このおおぞらのことではありません。そうではなく、わたしたちに見えない、別の天のことです。その後で、わたしたちに見えるこの天が『おおぞら』と呼ばれたのです。そこに、水の半分が引き上げられています。人類のために、雨や大雨や露となるためです。2:13:10 残りの半分の水は、川や泉や海となるために、地に残されました。さて、水はまだ地を、とくにくぼんだ所を覆っていました。そこで神は、ご自分のロゴスによって、水を一つ所に集まらせられ、かわいた地を見えるものとなさいました（創世記一・九）。それまで、地は見えないものだったのです。2:13:11 こうして地は見えるものとなりましたが、まだ整えられていませんでした。そこで神は、あらゆる種類の青草と種と植物によって、地をお整えになり、お飾りになりました。

2:14:1 では、これらのものの多様さと、さまざまな美しさと、その多さを見なさい。また、それらによって復活が示されていることも見なさい。それは、すべての人間にやがて起こる復活のしるしなのです。2:14:2 実際、よく考えてみて、驚かない人がいるでしょうか。いちじくのごく小さな種から、いちじくの木が生じるのです。ほかのごく小さな種からも、とても大きな木が生え出るのです。また、わたしたちは、世界は海に似ていると言います。2:14:3 実際、海は、川や泉が流れ込んで養い続けることがなかったなら、その塩辛さのために、とうの昔に干上がっていたでしょう。同じように、世界も、神の律法と預言者たちがなかったなら、そこに満ちる悪と罪のために、もう尽き果てていたでしょう。律法と預言者たちは、甘さとあわれみと義と、神の聖なる戒めの教えとを、流れ出させ、

わき出させているからです。2:14:4 また、海には島々があります。ある島々は、人が住めて、水に恵まれ、実りが豊かで、停泊地や港を備えています。嵐にもまれる人々が、そこに逃れ場を持てるようにです。同じように、神は、罪によって波立ち、嵐にもまれている世界に、集会をお与えになりました。それは聖なる教会と呼ばれます。そこには、島の良い港のように、真理の教えがあります。救われたいと願う人々は、そこへ逃れて来ます。彼らは真理を愛する者となり、神の怒りと裁きを逃れたいと願うのです。2:14:5 また、ほかの島々もあります。岩だらけで、水がなく、実りもなく、獣がすみ、人が住めない島々です。それらは、航海して嵐にもまれる人々を損ないます。そこで船は砕け、そこに寄る人々は滅びてしまいます。同じように、迷いの教え、つまり異端の教えがあります。それらは、近づく人々を滅ぼしてしまいます。2:14:6 真理の言葉に導かれていないからです。そうではなく、海賊は、船をいっぱいにすると、船を滅ぼそうとして、先に述べた場所へ突き進みます。それと同じように、真理から迷い出た人々にも、迷いによって滅びることが起こるのです。

2:15:1 第四日に、光るものが生じました。神は前もって知るかたなので、むなしい哲学者たちのたわごとを知っておられました。彼らは、地に生えるものは天体から生じると言って、神を退けようとするはずでした。そこで、真理が示されるために、植物と種が天体よりも先に生じたのです。後から生じたものが、それより先にあるものを造ることはできないからです。2:15:2 これらは、大きな奥義のしるしであり、型です。実際、太陽は神の型であり、月は人間の型です。太陽が力と栄光において月にはるかにまさるように、神は人類にはるかにまさっておられます。また、太陽がいつも満ちたままで欠けることがないように、神はいつも完全なままでおられます。あらゆる力と悟りと知恵と不死と、すべての善いものに満ちておられるのです。2:15:3 一方、月は月ごとに欠けて、いわば死にます。人間の型だからです。それから生まれ直して満ちていきます。やがて起こる復活のしるしとしてです。同じように、光るものより前に生じた三日も、三つ組の型です。神と、そのロゴスと、その知恵の型です。2:15:4 第四の型に当たるのは、光を必要とする人間です。神、ロゴス、知恵、人間とそろうためです。光るものが第四日に生じたのも、そのためです。また、星の置かれ方は、敬虔で、神の律法と戒めを守る義人たちの配置と秩序を表しています。2:15:5 実際、目立って輝く星々は、預言者たちをかたどっています。そのため、それらは傾くことなくとどまり、場所から場所へ移りません。一方、輝きにおいて別の位にある星々は、義人の民の型です。2:15:6 また、場所から場所へ移り、逃げ回る星々、つまり「さまよう星」とも呼ばれるものも、型となっています。神から離れ、その律法と命令を捨てた人々の型です。

第二巻 16〜20章　水の生き物と地の生き物、人間の創造、楽園

2:16:1 第五日には、水から出る生き物が生じました。それらによって、これらのものの中にも、神の多種多様な知恵が示されています（エペソ三・一〇）。実際、それらの中にある数の多さと、きわめて多様な種類とを、だれが数え尽くせるでしょうか。2:16:2 さらに、水から生じたものは、神から祝福を受けました。これも、しるしとなるためです。人々が、水と再生の洗いとによって、悔改めと罪のゆるしをやがて受けることのしるしです（ルカ二四・四七、テトス三・五）。その人々とは、真理に近づき、新たに生まれ、神から祝福を受ける人々すべてです。2:16:3 また、海の大いなる獣と肉食の鳥は、貪欲で、おきてを破る者たちの似姿です。実際、水にすむものと鳥とは、一つの本性から出たものです。それでも、そのうちのあるものは、本性にかなった状態にとどまり、自分より弱いものを害しません。そうではなく、神の律法を守り、地の種を食べます。一方、そのうちのあるものは、肉を食べて神の律法を破り、自分より弱いものを害します。それと同じように、義人たちは神の律法を守り、敬虔に、正しく生きて、だれにもかみつかず、だれも害しません。一方、強奪し、人を殺し、神を認めない者たちは、海の大いなる獣や、獣や、肉食の鳥に似ています。いわば、自分より弱い者たちを飲み込むからです。2:16:4 たしかに、水の生き物と這うものの種族は、神の祝福にあずかりました。それでも、とりたてて際立ったものは何も得ていません。

2:17:1 しかし、第六日に、神は四つ足のものと、獣と、陸に這うものとをお造りになりました。それらへの祝福については黙っておられます。祝福を、人間のために取っておかれたのです。その人間を、神は第六日にお造りになろうとしておられました。2:17:2 同時に、四つ足のものや獣は、ある人々の型として生じました。神を知らず、不敬虔で、地上のことを思い、悔い改めない人々の型です（ピリピ三・一九）。2:17:3 実際、不法から立ち返って正しく生きる人々は、鳥のように、魂で高く舞い上がります。上にあるものを思い、神のみこころにかなうのです（コロサイ三・二）。一方、神を知らず、不敬虔な人々は、鳥に似ています。翼は持っていても、舞い上がることも、神性の高みへ駆けて行くこともできない鳥です。2:17:4 同じように、そのような人々も、人間とは呼ばれています。しかし、罪の重みに押しつぶされて、低く地を這うことや、地上のことを思っています。また、生き物が獣と呼ばれるのは、獣のように荒々しくなることからです。初めから悪いものとして生じたからでも、毒を持つものとして生じたからでもありません。実際、初めから神によって生じたもので、悪いものは何一つありません。そうではなく、すべては良く、はなはだ良いものでした（創世記一・三一）。人間の罪が、それらを悪くしたのです。人間が背いたとき、それらも共に背いたからです。2:17:5 実際、家の主人が自分で正しくふるまえば、召使いたちも必ず秩序正しく暮らします。しかし、主人が罪を犯せば、奴隷たちも共に罪を犯します。それと同じように、人間は主人であったので、人間が罪を犯すと、奴隷であるものたちも共に罪を犯すことになったのです。2:17:6 ですから、人間が再び本性にかなった状態へ駆け戻り、もはや悪を行わなくなるとき、それらも初めの穏やかさに戻されるでしょう。

2:18:1 さて、人間の創造のことです。人間の造られ方は、人間にとっては言い表すことができないものです。もっとも、聖書は、それについて簡潔に述べているのですが。2:18:2 実際、神が『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう』と言われたことが、まず人間の尊さを示しています（創世記一・二六）。神はすべてをロゴスによってお造りになり、どれも片手間のわざとお考えになりました。それでも、人間の創造だけは、ご自分の手にふさわしい永遠のわざと考えておられるからです。2:18:3 さらに、神は、助けを必要としておられるかのように、『かたちに、かたどって人を造ろう』と言っておられることがわかります（創世記一・二六）。しかし、神は、ほかのだれかに『造ろう』と言われたのではありません。そうではなく、ご自分のロゴスと、ご自分の知恵に言われ

たのです。2:18:4 神は人間をお造りになり、ふえて地に満ちるように祝福なさると、すべてをその手の下にお置きになり、しもべとして従わせられました（創世記一・二八）。また、人間が初めから、地の実と、種と、青草と、木の実とを食物とするようにお命じになりました（創世記一・二九）。同時に、生き物も人間と食物を共にし、それらも地のすべての種から食べるようにお命じになりました（創世記一・三〇）。

2:19:1 こうして神は、天と地と海とその中のすべてを第六日に完成なさり、第七日に、お造りになったすべてのわざをおやめになって休まれました（創世記二・一～二）。2:19:2 それから、聖書は、こう言ってまとめ直しています。『これは天と地の起源の書である。天地が生じたとき、すなわち神が天と地を造られた日のことである。神は、野のすべての青草を、それが生じる前に造り、野のすべての草を、それがはえる前に造られた。神が地に雨を降らせず、地を耕す人もいなかったからである』（創世記二・四～五）。2:19:3 これによって聖書がわたしたちに示したのは、次のことです。そのころ、全地は神からの泉によって潤されていて、人間が地を耕す必要はありませんでした。そうではなく、神の命令に従って、地はすべてのものをおのずから生え出させていました。人間が耕して労苦することのないためです。2:19:4 神は『人を造ろう』と言っておられましたが、人間の創造は、まだ明らかになっていませんでした（創世記一・二六）。それで、人間の形造りも示されるように、聖書はわたしたちに教えています。人々のあいだで、答えの見つからない問いと思われないためです。聖書はこう言います。『しかし、地から泉がわきあがって、地の全面を潤していた。神は地のちりで人を形造り、その顔にいのちの息を吹きいれられた。そこで人は生きた魂となった』（創世記二・六～七）。2:19:5 そのため、魂は多くの人々のあいだで、不死のものと呼ばれています。神は人間を形造られた後、東の地方に、人間のために一つの土地を選ばれました。光においてすぐれ、いっそう明るい大気で澄みわたり、とても美しい植物に満ちた所です。神はそこに人間を置かれました（創世記二・八）。

2:20:1 聖なる物語の文言を、聖書は次のように記しています。『神は東のかた、エデンに楽園を植えて、その形造られた人をそこに置かれた。2:20:2 神は地から、見て美しく、食べるに良いすべての木をはえさせられた。また楽園の中央に、いのちの木と、善と悪について知りうることを知る木とをはえさせられた。2:20:3 また、一つの川がエデンから流れ出て楽園を潤し、そこから分かれて四つの源となった。その一つの名はピソンという。これはハビラの全地をめぐるもので、そこに金がある。2:20:4 その地の金は良く、またそこには紅玉と緑の石とがある。第二の川の名はギホンという。これはエチオピヤの全地をめぐる。2:20:5 第三の川はチグリスで、アッスリヤの向かいを流れるもの。第四の川はユフラテである。主なる神は、その形造られた人を取って楽園に置き、そこで働かせ、守らせられた。2:20:6 神はアダムに命じて言われた、「楽園のどの木からでも、心のままに食べてよろしい。しかし善と悪とを知る木からは、食べてはならない。それを食べるその日に、きっと死ぬであろう」。2:20:7 主なる神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」。神はさらに、野のすべての獣と、空のすべての鳥とを地から形造り、アダムのところへ連れてこられた。2:20:8 アダムがそれらを、すなわち生きた魂を何と呼んでも、それがその名となった。アダムは、すべての家畜と、空のすべての鳥と、野のすべての獣とに名をつけた。しかしアダムには、彼に似た助け手が見つからなかった。2:20:9 神はアダムに深い眠りを臨ませ、アダムは眠った。神はそのあばら骨の一つを取り、その代わりに肉を満たされた。主なる神は、アダムから取られたあばら骨で女を造り上げ、アダムのところへ連れてこられた。2:20:10 アダムは言った、「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これは女と呼ばれる。彼女の夫から取られたからである」。2:20:11 それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結び合い、ふたりは一つの肉となるのである。アダムとその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった』（創世記二・八～二五）。

第二巻 21〜24章　へびの誘惑と罰、楽園に来られたロゴス、地上の楽園

2:21:1 『さて、へびは、主なる神が造られた地の上のすべての獣のうちで、どれよりも賢かった。へびは女に言った、「なぜ神は、『あなたがたは楽園のどの木からも食べてはならない』と言われたのですか」。2:21:2 女はへびに言った、「わたしたちは楽園のどの木からも食べます。しかし、楽園の中央にある木の実については、神は言われました。『あなたがたはそれを食べてはならない。それに触れてもならない。死んではいけないからである』」。2:21:3 へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べる日に、あなたがたの目が開け、神々のようになって善と悪とを知る者となることを、神は知っておられたからです」。2:21:4 女が見ると、その木は食べるに良く、目に見て好ましく、見つめるにも美しかった。女はその実を取って食べ、共にいた夫にも与えた。そして、ふたりは食べた。2:21:5 すると、ふたりの目が開け、自分たちが裸であることがわかった。ふたりはいちじくの葉をつづり合わせ、自分たちのために腰に巻くものを作った。ふたりは、夕方に楽園を歩まれる主なる神の声を聞いた。そこで、アダムとその妻とは、神の顔を避けて、楽園の木の間に身を隠した。2:21:6 主なる神はアダムを呼んで言われた、「あなたはどこにいるのか」。彼は言った、「わたしは楽園であなたの声を聞きました。わたしは裸なので、恐れて身を隠したのです」。2:21:7 神は彼に言われた、「わたしは、この木からだけは食べるなとあなたに命じておいた。その木から食べたのでなければ、あなたが裸であることを、だれが知らせたであろうか」。アダムは言った、「あなたがわたしに与えてくださった女が、木からわたしにくれたので、わたしは食べたのです」。2:21:8 神は女に言われた、「あなたは、なんということをしたのか」。女は言った、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」。主なる神はへびに言われた、「おまえは、この事をしたので、地の上のすべての獣のうち、最ものろわれる。おまえは胸と腹とで這いあるき、一生、土を食べるであろう。2:21:9 わたしは、おまえと女とのあいだに、また、おまえのすえと女のすえとのあいだに、敵意を起こす。彼はおまえの頭を狙い、おまえは彼のかかとを狙うであろう」。2:21:10 また女に言われた、「わたしはあなたの苦しみと呻きとを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。あなたの向かうところは夫であって、彼はあなたを治めるであろう」。2:21:11 また、アダムに言われた、「あなたは妻の声を聞いて木から食べた。わたしが、これだけは食べるなとあなたに命じておいたその木から食べたのだ。それで、地はあなたのわざにおいてのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食べる、2:21:12 地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたはあなたの野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに、あなたが取られた土に帰る。あなたは土であり、土へと去って行くからである」』（創世記三・一〜一九）。2:21:13 つまり、人間と楽園の物語について、聖書の文言は、以上のように記しています。

2:22:1 それでは、あなたはわたしに言うでしょう。「あなたは、神は場所の中に収められるはずがない、と言っている。それなら、どうして今、神が楽園を歩いている、と言うのか」。わたしの言うことを聞きなさい。たしかに、万物の神であり父であるかたは、何ものにも収められないかたで、場所の中に見いだされるかたではありません。神の休み所となる場所はないからです（イザヤ六六・一）。2:22:2 一方、神のロゴスは、神の力であり、知恵です。神はこのかたによって万物をお造りになりました。このかたが、万物の父であり主であるかたの役をお引き受けになり、神の役として楽園に来られ、アダムと語り合っておられました。2:22:3 実際、聖書そのものが、アダムが声を聞いたと言っていることを、わたしたちに教えています（創世記三・一〇）。では、声とは、神のロゴス、すなわち神の子でもあるかたでなくて、何でしょうか。2:22:4 ただし、詩人たちや神話作家たちが、神々の子らが交わりによって生まれると語るような意味ではありません。そうではなく、真理が語るとおりの意味です。真理は、神の心の内奥にいつも宿っておられるロゴスのことを語っています。2:22:5 何かが生じる前か

ら、神はこのロゴスを相談相手として持っておられたからです。このかたは、神ご自身の知性であり、思慮です。しかし、神は、ご計画になったものを造ろうと望まれたとき、このロゴスを外に発せられたものとしてお生みになりました。このかたは、すべての造られたものに先だって生れたかたです（コロサイ一・一五）。神ご自身がロゴスを欠いて空になられたのではありません。そうではなく、ロゴスをお生みになって、ご自分のロゴスといつも交わっておられるのです。2:22:6 そのため、聖なる書と、霊を宿す人々すべてが、わたしたちに教えています。その中のひとりヨハネは、こう言います。『初めにロゴスがあった。ロゴスは神と共にあった』（ヨハネ一・一）。こう言って、最初は神だけがおられ、神の内にロゴスがおられたことを示しているのです。2:22:7 それから、こう言います。『ロゴスは神であった。すべてのものは、これによってできた。これによらないでできたものは、一つもなかった』（ヨハネ一・一、三）。ロゴスは神であり、神から生まれ出たかたです。ですから、万物の父は、お望みのときに、このかたをどこかの場所へお遣わしになります。このかたは、父に遣わされて来られると、人の耳に聞こえ、人の目に見えて、場所の中に見いだされるのです。

2:23:1 さて、神は人間を第六日にお造りになりましたが、その形造りは、第七日の後に明らかになさいました。楽園をお造りになったのも、そのときです。人間が、よりすぐれた場所、際立った土地にいるためでした。2:23:2 これらのことが真実であることは、事実そのものが示しています。実際、女たちはお産のときに産みの苦しみを味わい、その後でその苦しみを忘れます。このことに、どうして気づかずにいられるでしょうか。それは、人類がふえて多くなるようにという神の言葉が、成就するためです（創世記一・二八）。2:23:3 また、へびへの裁きにも、どうして気づかずにいられるでしょうか。へびは腹で這い、土を食べて、忌み嫌われるものとなっています。これもまた、わたしたちにとって、先に述べたことの証拠となるためです。

2:24:1 さて、神は、さらに地から、見て美しく、食べるに良いすべての木をはえさせられました（創世記二・九）。実際、最初は、第三日に生じたもの、すなわち植物と種と青草だけがありました。しかし、楽園の中のものは、際立った美しさと麗しさとを備えて生じました。神がお植えになった植物、とさえ呼ばれているほどです。2:24:2 ほかの植物なら、この世界も、似たものを持っています。しかし、二本の木、すなわちいのちの木と知識の木とは、ほかのどの地にもなく、ただ楽園の中にだけありました。2:24:3 楽園も地であり、地の上に植えられていることは、聖書が言っています。『神は東のかた、エデンに楽園を植えて、そこに人を置かれた。神はさらに地から、見て美しく、食べるに良いすべての木をはえさせられた』（創世記二・八〜九）。2:24:4 ですから、聖書は、『さらに地から』と『東のかた』という言葉によって、わたしたちにはっきりと教えています。楽園は、この天の下にあるということです。この天の下には、東もあり、地もあるのです。2:24:5 ヘブル語でエデンと言われる語は、訳すと「楽しみ」です。また聖書は、一つの川がエデンから流れ出て楽園を潤し、そこから分かれて四つの源となることを示しました（創世記二・一〇）。そのうちの二つ、ピソンとギホンと呼ばれる川は、東の地方を潤しています。とくにギホンがそうです。ギホンはエチオピヤの全地をめぐる川で、エジプトではナイルと呼ばれる川となって現れる、と言われています。2:24:6 ほかの二つの川、チグリスとユフラテと呼ばれる川は、わたしたちのあいだで、はっきりと知られています。これらの川は、わたしたちの地方のすぐ近くまで来ているからです。先に述べたとおり、神は人間を、働き、守るようにと楽園に置かれて、すべての実から食べるようにお命じになりました。明らかに、いのちの木の実からもです。ただ、知識の木からだけは、味わってはならないとお命じになりました。2:24:7 神は人間を、人間がそこから生じた地から楽園へお移しになって、進歩のきっかけをお与えになりました。人間が成長して完全な者となり、さらに神であると示されて、こうして天にも昇り、永遠性を持つようになるためです。人間は中間のものとして生じていたからです。まったく死ぬべきものでもなく、まったく不死のものでもなく、そのどちらをも受け入れることのできるものでした。それと同じように、楽園という土地も、美しさの点では、この世界と天との中間のものとして生じたのです。2:24:8 また、『働く』と言われていることは、ほかの何かの働きを示しているのではありません。そうではなく、神の戒めを守ることを示しています。人間が聞き従わずに自分を滅ぼすことのないためです。現に、人間は罪によって自分を滅ぼしてしまいました。

第二巻 25〜28章　知識の木と不従順、死ぬべきものでも不死でもない人間、エバと悪霊

2:25:1 さて、知識の木は、それ自体は良いもので、その実も良いものでした。ある人々が思っているように、木が死を宿していたのではなく、不従順が死を宿していたからです。2:25:2 実際、その実の中には、知識のほかには何もありませんでした。そして知識は、人がそれをふさわしく用いるなら、良いものです。しかし、そのときの年齢では、アダムはまだ幼な子でした。そのため、知識をふさわしく受けとめることが、まだできなかったのです。2:25:3 今でも、子供は生まれてすぐにパンを食べることはできないからです。そうではなく、まず乳で育てられ、それから年齢が進むにつれて、堅い食物にも進みます。2:25:4 アダムの場合も、同じようになったはずでした。ですから、神は知識の木から食べるなとお命じになりました。それは、ある人々が思っているように、アダムをねたまれたからではありません。さらにまた、神は、アダムを、ご自分の戒めに従う者となるかどうか、試そうと望まれたのです。2:25:5 それと同時に、神は、人間がより長いあいだ、幼な子のままで、素朴で純真な者としてとどまることをお望みになりました。素朴さと無垢のうちに両親に従うことは、神の前で敬虔なことであるだけではありません。人々の前でも敬虔なことだからです。2:25:6 子供が両親に従わなければならないのなら、万物の神であり父であるかたには、なおさらではありませんか。さらにまた、幼い子供が年齢を越えた考えを持つのは、見苦しいことです。2:25:7 人は、年齢において順を追って成長するのと同じように、考えることにおいても順を追って成長するからです。それに、法が何かを断つように命じても、人がそれに従わないことがあります。そのとき、罰をもたらすのは法ではなく、不服従と不従順であることは明らかです。2:25:8 実際、父親は、自分の子供に、あるものを断つように命じることがあります。子供が父の戒めに従わないと、その不従順のために打たれ、懲らしめを受けます。その場合、物そのものが打撃なのではありません。そうではなく、不従順が、従わない者に辱めを招くのです。2:25:9 同じように、最初に形造られた人にとっても、不従順が、楽園から追い出されることを招いたのです。とはいえ、知識の木が何か悪いものを持っていたからではありません。むしろ、人間は不従順のために、労苦と痛みと苦しみとをなめ尽くし、ついには死の下に倒れたのです。

2:26:1 そして、このことでも、神は人間に大きな恵みをお与えになりました。人間が罪の中にあるまま、いつまでもとどまるようにはなさらなかったのです。そうではなく、神は、ある意味で追放に似たかたちで、人間を楽園から追い出されました。人間が懲らしめによって、定められた期間のうちに罪の償いをし、しつけを受けて、後に呼び戻されるためです。2:26:2 そのため、人間がこの世界で形造られたとき、二度楽園に置かれたかのように、創世記に奥義として書かれています（創世記二・八、一五）。一度目は、人間が置かれたときに成就し、二度目は、復活と裁きの後に成就することになるためです。2:26:3 それだけではありません。器は、作られた後に何か傷ができると、溶かし直されるか、造り直されて、新しく完全なものになります。それと同じことが、死を通して人間にも起こるのです。人間は、復活のときに健やかな者として見いだされるために、いわば砕かれているからです。わたしが言う健やかな者とは、しみがなく、正しく、不死である者のことです。2:26:4 また、神がお呼びになって『アダムよ、あなたはどこにいるのか』と言われたのは、ご存じなかったからではありません（創世記三・九）。そうではなく、寛容なかたなので、悔い改めて罪を言い表すきっかけを、アダムにお与えになったのです。

2:27:1 しかし、だれかがわたしたちに言うでしょう。「それでは、人間は本性において死ぬべきものとして生じたのか」。決してそうではありません。「では、不死のものとしてか」。わたしたちは、そうとも言いません。しかし、だれかが言うでしょう。「それでは、人間は何ものとしても生じなかったのか」。そうとも言いません。2:27:2 つまり、人間は本性において、死ぬべきものとして生じたのでも、不死のものとして生じたのでもありません。もし神が人間を初めから不死の

ものとしてお造りになっていたなら、神としてお造りになっていたことになるからです。また逆に、死ぬべきものとしてお造りになっていたなら、神が人間の死の原因であるように思われたでしょう。2:27:3 したがって、神は人間を、不死のものとしても、死ぬべきものとしてもお造りになりませんでした。そうではなく、上で述べたとおり、そのどちらをも受け入れることのできるものとしてお造りになりました。人間が神の戒めを守って不死に属することへ傾くなら、報いとして神から不死を受け、神となるためです。逆に、神に聞き従わずに死に属する事柄へ向きを変えるなら、自分自身が自分の死の原因となるためです。2:27:4 神は人間を、自由な者、自分のことを自分で決める力を持つ者としてお造りになったからです。ですから、人間が怠りと不従順によって自分に招いたものがあります。それを神は今、人間が神に従うなら、人へのご自身の愛とあわれみによって、人間に赦してくださいます。2:27:5 実際、人間は聞き従わずに、自分に死を招きました。それと同じように、望む人は、神のみこころに従って、自分のために永遠のいのちを得ることができます。神はわたしたちに、律法と聖なる戒めとをお与えになったからです。その戒めを行う人はだれでも救われることができ、復活にあずかって、朽ちないものを受け継ぐことができます。

2:28:1 アダムは楽園から追い出されて、こうしてその妻エバを知りました（創世記四・一）。エバは、神がアダムのあばら骨から、彼の妻としてお造りになった女です。神がそうなさったのも、アダムの妻を別に形造ることがおできにならなかったからではありません。そうではなく、人々が多くの神々の名を唱えるようになることを、神は前もってご存じだったのです。2:28:2 つまり、神は前もって知るかたであり、迷いがへびを通して、存在しない多くの神々の名を唱えるようになることをご存じでした。神はひとりであるのに、迷いはそのときからすでに、多くの神々という考えをひそかに蒔こうとたくらんでいたからです。そして、『あなたがたは神々のようになる』と言おうとしていたのです（創世記三・五）。そこで、ある神が男を造り、別の神が女を造ったと考えられないように、神はふたりを別々にはお造りにならなかったのです。2:28:3 それだけではありません。このことによって、神のひとりの支配という奥義が示されるためにも、神はアダムといっしょにその妻をお造りになりました。また、ふたりの互いの愛がいっそう大きくなるためでもありました。2:28:4 さて、アダムはエバに向かって、『これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉』と言いました（創世記二・二三）。さらに預言して、こう言いました。『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結び合い、ふたりは一つの肉となるのである』（創世記二・二四）。このことは、まさにわたしたち自身のうちで成就しているのが見られます。2:28:5 実際、正しく結婚する人はだれでも、自分の妻と結び合って一つとなり、妻をいっそう愛します。そのとき、母も父も、すべての親族も、家の者たちもみな軽んじるではありませんか。2:28:6 そのため、自分の妻のために死の危険にまで身をさらす人さえ、しばしばいます。このエバは、初めにへびに惑わされ、罪の始まりとなりました。悪を行う悪霊は、サタンとも呼ばれ、そのときへびを通してエバに語りかけた者です。そのため、この悪霊は今もなお、とりついて熱狂させる人々のうちに働き、「エウアン」という叫びでこのエバを呼び出しています。2:28:7 また、この者が悪霊とも龍とも呼ばれるのは、神のもとから逃げ去ったためです。最初は御使だったからです。この者については、語ることが多くあります。そのため、それらについての話は今は省きます。実際、この者については、わたしは別のところで論じました。

第二巻 29〜31章　カインとアベル、カインの子孫、洪水の後の町と王

2:29:1 さて、アダムがその妻エバを知ったとき、エバはみごもって男の子を産みました。その名はカインです。そしてエバは言いました。『わたしは神によって、ひとりの人を得た』（創世記四・一）。エバはさらに、ふたり目の子を産みました。その名はアベルです。2:29:2 アベルは羊を飼う者となり、カインは地を耕しました（創世記四・二）。さて、ふたりについては、語られていることがもっと多くあります。それだけではありません。解き明かしの筋道もあります。そのため、物語のことは、『世界の創世記』と題された書そのものが、学ぶことを好む人々に、もっと詳しく教えることができます。2:29:3 さて、サタンは、アダムとその妻が生きているだけでなく、子供までもうけたのを見ました。サタンは彼らを死なせることができなかったので、ねたみにかられていました。そして、アベルが神に喜ばれているのを見たとき、その兄でカインと呼ばれる者のうちに働いて、弟アベルを殺させたのです。2:29:4 こうして、死がこの世界に歩み入り始め、今に至るまで、人間のすべての種族に及ぶことになったのです。しかし神は、あわれみ深いかたです。神は、アダムのときと同じように、カインにも悔い改めて罪を言い表すきっかけを与えようと望まれて、こう言われました。『弟アベルは、どこにいますか』（創世記四・九）。2:29:5 カインは、神に対して不服従な態度で答えました。『知りません。わたしが弟の番人でしょうか』（創世記四・九）。すると神はカインにお怒りになって、言われました。『なぜ、このようなことをしたのですか。2:29:6 あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます。今、あなたは地からのろわれています。地は、あなたの手から弟の血を受けようと、口を開いたのです。あなたは地上で、うめき、震える者となるでしょう』（創世記四・一〇〜一二）。2:29:7 そのため、地はそれ以来おびえて、もはや人の血を受け入れません。それどころか、どんな生き物の血も受け入れないのです。このことから、原因は地そのものではなく、背いた人間であることが明らかです。

2:30:1 さて、カインもまた男の子をもうけました。その名はエノクです。そしてカインは町を建て、その子の名にちなんでエノクと名づけました（創世記四・一七）。そのときから、町が建てられることが始まりました。しかも、これは洪水の前のことです。ホメロスが『言葉を語る人々の町は、まだ築かれていなかったからだ』と偽って言うのとは違うのです。2:30:2 エノクには、イラデという名の男の子が生まれました。イラデはメホヤエルと呼ばれる者を生み、メホヤエルはメトサエルを、メトサエルはレメクを生みました。レメクはふたりの妻をめとりました。その名はアダとチラです（創世記四・一八〜一九）。2:30:3 そのときから、多くの妻を持つことが始まり、また音楽も始まりました。レメクには三人の息子が生まれたからです。ヤバル、ユバル、トバルカインです。ヤバルは、天幕に住んで家畜を飼う人となりました。ユバルは、琴と竪琴とを初めて示した人です。トバルカインは、槌を振るう鍛冶屋となり、青銅と鉄とを鍛えました（創世記四・二〇〜二二）。2:30:4 さて、カインの子孫の系図は、ここまでです。その後、カインの子孫の系図は忘れ去られました。カインが自分の弟を殺したためです。2:30:5 神は、アベルの代わりに、エバがみごもって男の子を産むようにしてくださいました。その子はセツと呼ばれます（創世記四・二五）。セツから、その後の人類が今に至るまで続いているのです。2:30:6 学ぶことを好み、望む人々には、すべての世代についても、聖なる書によって示すのはたやすいことです。実際、先に述べたとおり、わたしはすでに別の書で、その一部を論じました。歴史についての第一の書で、系図の順序を述べたのです。2:30:7 これらすべてを、わたしたちに教えるのは聖霊です。モーセとほかの預言者たちを通して語った聖霊です。ですから、神を敬うわたしたちの書は、すべての歴史家と詩人の書よりも古いものです。それだけではありません。それらよりも真実であることが示されるのです。2:30:8 また、音楽についても、アポロンがその発明者だった、とたわごとを言う者たちがいます。別の者たちは、オルフェウスが鳥の美しい声から

音楽を見いだした、と言います。しかし、彼らの言うことは、中身がなく、むなしいことが明らかになります。アポロンもオルフェウスも、洪水から何年もたってから生まれたからです。2:30:9 ノアは、ある人々からデウカリオンと呼ばれています。ノアのことについては、先に述べた書で、わたしが話しました。あなたも、望むなら、その書を読むことができます。

2:31:1 洪水の後、町と王とが再び始まりました。その次第はこうです。最初の町はバビロンです。そしてエレク、アカデ、カルネがシナルの地にできました（創世記一〇・一〇）。2:31:2 そして、それらの町の王となったのは、ニムロデという名の人でした。これらの町から、アシュルという名の人が出ました。そのため、アッスリヤ人という呼び名もあるのです。ニムロデは町々を建てました。ニネベ、レホボテイリ、カラ、およびニネベとカラとの間にあるレセンです（創世記一〇・一一〜一二）。2:31:3 ニネベは、とりわけ大きな町となりました。ノアの子セムには、ミツライムという名の、もうひとりの息子がいました。この人は、ルデ族、アナミ族と呼ばれる人々、レハビ族、ナフト族、パテロス族、カスル族を生みました。そこからペリシテ族が出たのです（創世記一〇・一三〜一四）。2:31:4 さて、ノアの三人の息子たちと、彼らから出た一族と系図との一覧は、先に述べた書で、わたしが手短に記しました。今は、省いたことに触れておきます。町と王とについて、また、同じ発音、同じ言葉であったころに起こったことについてです（創世記一一・一）。2:31:5 言葉が分けられる前に、先に書いたこれらの町ができました。人々が分かれて散ろうとしていたとき、彼らは神によらず、自分たちの考えで相談しました。町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう、そして自分たちのために栄光ある名を上げよう、というのです（創世記一一・四）。2:31:6 そこで、人々は神の御旨に反して、大それたわざをあえて行おうとしました。そのため、神は彼らの町を打ち倒され、塔を倒されました。そのときから、神は人間の言葉をお変えになって、ひとりひとりに違う言葉をお与えになりました。2:31:7 シビュラも、世界に怒りが来ようとしていることを告げて、このように示しました。シビュラはこう言いました。『しかし、大いなる神の脅しが果たされるとき。その脅しは、死すべき者たちがアッスリヤの地に塔を築いたとき、神がかつて彼らに告げられたものだ。2:31:8 彼らはみな同じ言葉を話し、星の輝く天に昇ろうとした。すると、不死なるかたは、ただちに風に大きな力を加えられた。そこで風は、高くそびえる大きな塔を投げ倒し、死すべき者たちのあいだに互いの争いを起こした。2:31:9 そして塔が倒れ、人間の言葉が死すべき者たちの多くの言葉に分かれたとき』と、この後も続きます。つまり、これらのことはカルデヤ人の地で起こったのです。2:31:10 カナンの地には、ハランという名の町ができました。そのころ、エジプトの最初の王となったのはパロで、エジプト人のあいだではネカオトとも呼ばれました。こうして、代々の王が続いたのです。2:31:11 シナルの地、カルデヤ人と呼ばれる人々のところでは、最初の王はアリオクでした。その後は別の王エラサル、その後はエラムの王ケダラオメル、その後はアッスリヤ人と呼ばれる国々の王テダルでした。2:31:12 ほかに五つの町が、ノアの子ハムの領分にできました。最初はソドムと呼ばれる町、次にゴモラ、アデマ、ゼボイム、そしてゾアルとも呼ばれたベラです（創世記一四・二）。2:31:13 その王たちの名は次のとおりです。ソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アデマの王シナブ、ゼボイムの王セメベル、ゾアルの王バラクです。ゾアルはベラとも呼ばれました。2:31:14 この王たちは、アッスリヤ人の王ケダラオメルに十二年のあいだ仕えました。そして十三年目に、ケダラオメルから離れて背きました（創世記一四・四）。こうしてそのとき、アッスリヤ人の四人の王が、五人の王と戦いを交えることになったのです。2:31:15 これが、地上に戦争が起こった最初の始まりでした。彼らは、カルナイムの巨人たちと、その巨人たちとともにいた強い民とを打ち倒しました。また、自分たちの町にいたエミびとと、セイルと呼ばれる山地にいたホリびとを打ちました。そして、荒野にある、パランのテレビンの木と呼ばれる所にまで及んだのです（創世記一四・五〜六）。2:31:16 同じころ、正しい王で、メルキゼデクという名の人が、サレムの町にいました。今はヒエロソリュマと呼ばれる町です。この人は、いと高き神のすべての祭司のうちで、最初の祭司となりました（創世記一四・一八）。2:31:17 この人にちなんで、町はエルサレムと名づけられました。先に述べたヒエロソリュマです。この人から、祭司たちが地上のいたるところに現れるようになったのです。この人の後、ゲラルでアビメレクが王となりました。その後は別のアビメレクでした。それから、ヘテびととも呼ばれたエフロンが王となりました。2:31:18

たしかに、早い時代にいた王たちについての記録は、このように名を伝えています。しかし、アッスリヤ人の王たちのうち、長い年月のあいだの残りの王たちは、書き記されることなく、黙って省かれました。いちばん後の、わたしたちに近い時代になって、アッスリヤ人の王たちがいたことが記録されています。テグラテピレセル、その後シャルマネセル、それからセナケリブです（列王紀下一五・二九、一七・三、一八・一三）。[2:31-19] セナケリブの三人の長のひとりとなったのが、エチオピヤ人アデランメレクで、この人はエジプトも治めました。とはいえ、これらのことは、わたしたちの書に比べれば、ずっと新しいことです。

第二巻 32〜35章　人の広がり、預言者たちの一致

2:32:1 さて、学ぶことを好み、古いことを好む人々は、ここから歴史を考えることができます。聖なる預言者たちを通してわたしたちが語ることが、新しいものかどうかをです。実際、初めのうち、当時の人間は、アラビヤの地とカルデヤの地に少ししかいませんでした。しかし、言葉が分けられた後、人々は少しずつ数を増し、全地にふえ広がり始めたのです。2:32:2 そして、ある人々は、東のほうへ移って住みました。ほかの人々は、大きな大陸の地方と北のほうへ移り、北の地域のブリタニア人のところにまで広がりました。別の人々は、カナンの地に住みました。ユダヤともピニケとも呼ばれた地です。また、エチオピヤ、エジプト、リビヤの地方と、焼けつく地帯と呼ばれる所と、西にまで延びる地域にも住みました。残りの人々は、海沿いの地とパンフリヤから先の地方に住みました。また、アジヤ、ギリシヤ、マケドニヤ、さらにイタリヤと、ガリア、イスパニヤ、ゲルマニアと呼ばれる地方にも住みました。こうして、今では全地が、そこに住む人々で満ちているのです。2:32:3 こうして、地上の人間の住む所は、初めは東と南と西との三つに分かれていました。その後、人間がおびただしい数になって、地のほかの地方にも人が住むようになりました。2:32:4 ところが、歴史家たちはこれらのことを知らずに、世界は球の形だと言い、また、いわば立方体にたとえようとします。世界の創造も、人が住むようになった次第も知らないのに、どうして彼らはこれらのことを真実だと言えるでしょうか。2:32:5 先に述べたとおり、人間は地上で少しずつふえ、数を増していきました。そのようにして、海の島々にもほかの地域にも人が住むようになったのです。

2:33:1 それでは、賢者や詩人や歴史を書く者と呼ばれる者たちのうち、だれがこれらのことについて真実を語ることができたでしょうか。彼らはずっと後の時代に生まれ、多くの神々を持ち込んだ者たちです。彼ら自身、町々ができてから何年もたって生まれました。王たちや民族や戦争よりも後の者たちなのです。2:33:2 彼らは、すべてのことに触れるべきだったからです。洪水の前に起こったことにもです。そして、エジプト人のもとの預言者たちやカルデヤ人や、そのほかの歴史家たちは、詳しく語るべきでした。世界の創造と人間の創造について、また、その後に起こったことについてです。もし彼らが、神からの清い霊によって語り、自分たちを通して語られたことを真実なこととして告げたのなら、そうであるはずです。また、過去のことや今のことだけでなく、世界にこれから起こることも、彼らは前もって告げるべきでした。2:33:3 そのため、ほかの者はみな迷っていて、キリスト者だけが真理を受け入れていることが示されます。わたしたちは聖霊によって教えられているからです。聖霊は、聖なる預言者たちのうちにあって語り、すべてのことを前もって告げたのです。

2:34:1 これからは、あなたは好意をもって、神のことを調べればよいのです。わたしが言うのは、預言者たちを通して語られたことです。そうすれば、わたしたちの言うことと、ほかの人々の言うこととを比べて、真理を見いだすことができるでしょう。2:34:2 つまり、神々と呼ばれる者たちの名が、彼らのもとでは人間の名であることを、わたしは上で明らかにしました。彼らが書き記した歴史そのものから、それを証明したのです。2:34:3 また、その神々の像は、今に至るまで毎日造られています。それは偶像であり、人の手のわざです（詩篇一一五・四、一三五・一五）。むなしい人間の群れは、これらに仕えています。しかし、万物の造り主であり作り手であり、すべての息あるものを養うかたを、彼らは退けます。先祖から受け継いだ迷いのために、愚かな考えにとらわれ、むなしい教えに従っているのです。2:34:4 それでも、万物の神であり、父であり、創造者であるかたは、人類をお見捨てになりませんでした。そうではなく、律法をお与えになり、聖なる預言者たちをお遣わしになりました。人間の種族に告げ知らせ、教えるためです。それは、わたしたちひとりひとりが酔いからさめて、神はただひとりであることを知るためでした。預言者たちはまた、忌まわしい偶像礼拝から遠ざかるように教えました。姦淫、殺人、不品行、盗み、金銭を愛すること、偽り

の誓い、怒り、あらゆる好色と汚れからも遠ざかるように、と教えたのです。また、人は自分の身に起こってほしくないことは何でも、ほかの人にもしないように、と教えました。こうして、正しいことを行う人が、永遠の刑罰を逃れ、神から永遠のいのちにふさわしい者とされるためです。

2:35:1 さて、神の律法は、偶像を拝むことを禁じるだけではありません。天体、つまり太陽や月やほかの星を拝むことも禁じます。それどころか、天も地も海も、泉も川も、崇めてはならないのです。そうではなく、ただまことの神、万物の造り主だけに、清い心と純粋な思いとをもって仕えなければなりません。2:35:2 そのため、聖なる律法はこう言います。『あなたは姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証してはならない。隣人の妻をむさぼってはならない』（申命記五・一七〜二一）。預言者たちも同じです。さて、ソロモンは、目くばせによっても罪を犯さないことを、わたしたちに教えて、こう言います。『あなたの目は、まっすぐに見よ。あなたのまぶたは、正しいことに目くばせせよ』（箴言四・二五）。2:35:3 モーセもまた、自身が預言者であって、神のひとりの支配について、こう言います。『これがあなたがたの神である。天を堅くなさり、地を造られるかたである。その御手は、天の万象をことごとく現された。しかし、それらのあとに従って歩むようにと、あなたがたにお示しになったのではない』。2:35:4 イザヤもまた言います。『主なる神はこう言われる。天を堅くなさり、地とその中にあるものの基をすえられ、その上の民に息を、その上を歩む者に霊をお与えになるかた。これがあなたがたの神、主である』（イザヤ四二・五）。2:35:5 また、イザヤを通して、神はさらにこう言われます。『わたしは地を造って、その上に人を造った。わたしは手をもって天を堅くした』（イザヤ四五・一二）。また、別の章ではこう言われます。『これがあなたがたの神、地の果を造られたかたである。飢えることも、疲れることもなく、その悟りははかりがたい』（イザヤ四〇・二八）。2:35:6 エレミヤも同じです。こう言います。『その力をもって地を造り、その知恵をもって世界を堅く立て、その悟りをもって天と、天にある多くの水とをのべられた。また、地の果から雲を立ちのぼらせ、雨のためにいなびかりを造り、その倉から風を取り出された』（エレミヤ一〇・一二〜一三）。2:35:7 預言者たちがみな、どれほど親しく調和して語ったかを、見ることができます。一つの同じ霊によって、神のひとりの支配と、世界の誕生と、人間の創造とについて、声をあげたのです。2:35:8 それだけではありません。預言者たちは、神を認めない人間の種族を嘆き悲しんで、もだえ苦しみました。また、賢いと見なされている者たちを、その迷いと心のかたくなさのゆえに、恥じ入らせたのです。2:35:9 エレミヤは言いました。『すべての人は、その知識のために愚かになった。すべての金細工人は、その刻んだ像のために恥をこうむった。銀細工人が銀を打つのはむなしい。それらのうちには息がない。それらは罰せられる日に滅びる』（エレミヤ一〇・一四〜一五、六・一九）。2:35:10 ダビデも同じことを言います。『彼らは腐れはて、その行いによって憎むべき者となった。善を行う者はない、ひとりもない。みな迷い、みなひとしく無益な者となった』（詩篇一四・一、三）。ハバククも同じように言います。『人がそれを刻んで、偽りの幻としたとて、刻んだ像は人になんの益があろうか。2:35:11 わざわいなるかな、石に向かって「起きよ」と言い、木に向かって「高くなれ」と言う者よ』（ハバクク二・一八〜一九）。ほかの真理の預言者たちも、同じように言いました。また、預言者は大勢いて、親しく調和したことを数えきれないほど語りました。その数多い預言者たちを、わたしが数え上げる必要があるでしょうか。2:35:12 望む人は、預言者たちを通して語られたことを読んで、真理を正確に知ることができるからです。憶測やむなしい骨折りに惑わされずにすむのです。さて、先に挙げたこれらの預言者たちは、ヘブル人のうちに現れました。無学な者、羊飼い、ただの人たちでした。

第二巻 36〜38章　シビュラの詩、裁きを語る詩人たち

2:36:1 また、シビュラは、ギリシャ人とほかの民族のあいだに現れた女預言者です。シビュラは、その預言の初めで人間の種族を責めて、こう言います。『死すべき、肉なる人間たちよ、無にひとしい者たちよ。いのちの終わりを見もせずに、なぜ、こうもたちまち高ぶるのか。2:36:2 おまえたちは、神におののかず、神を恐れもしないのか。神はおまえたちを見守るかた、いと高く、すべてを知り、すべてを見渡し、すべてを見届ける証人である。すべてを養う造り主であり、すべてのもののうちに甘い霊をお置きになり、その霊を死すべき者すべての導き手とされた。2:36:3 神はただひとり。ただひとりでお治めになり、並はずれて大きく、生じたかたではない。全能で、目に見えず、ただひとりですべてを見ておられる。しかし、ご自身は、死すべき肉なる者のだれの目にも見えない。実際、どんな肉が、天におられるまことの神を、目で見ることができるだろうか。死ぬことのない神、天の高みに住まわれるかたを。2:36:4 いや、人間は、太陽の光に向かって立つことさえできない。死すべき者として生まれ、骨のうちにある者、血管と肉である者たちだからだ。ただひとりおられるかた、世界の導き手であるかたを、敬え。このかたは、ただひとり、永遠から永遠におられる。自らによっておられ、生じたかたではなく、常にすべてを治めておられる。そして、死すべき者すべてに、すべての人に共通の光のうちで、裁きを分け与えておられる[1]。2:36:5 おまえたちは、その悪いたくらみにふさわしい報いを受けるだろう。まことの、永遠の神をあがめることも、神に百頭の牛の聖なるいけにえをささげることもやめて、冥府の悪霊どもにささげたからだ。2:36:6 おまえたちは、思い上がりと狂気のうちに歩む。正しくまっすぐな道を捨てて去り、いばらととげの中をさまよった。むなしい、死すべき者たちよ、闇の中、光のない黒い夜の中をさまようのを、やめよ。夜の闇を離れ、光をつかめ。2:36:7 見よ、このかたは、すべての者にとって明らかで、迷いがない。来たれ。いつまでも闇と暗黒を追い求めるな。見よ、太陽の、目に甘い光が、ひときわ輝いている。知恵をおまえたちの胸に置いて、知れ。神はただひとりである。雨、風、地震、稲妻、飢饉、疫病、痛ましい苦しみ、雪、氷を送られるかたである。2:36:8 なぜ、一つ一つ数え上げることがあろうか。神は天をお導きになり、地をお治めになり、ご自身で存在しておられる』。また、シビュラは、生じたと言われる者たちに向かって、こう言いました。『もし生じたものがみな滅びもするのなら、神が、男の腰と胎から形づくられたものであることはできない。2:36:9 そうではなく、神はただひとり、すべてにまさって高いかたである。このかたが、天と太陽と星と月と、実を結ぶ地と、海の水のうねりと、高い山々と、尽きることのない泉の流れを造られた。また、水に住むものの数えきれない大群をお生みになり、地を這い動くものと、色とりどりの鳥たちを養っておられる。鳥たちは澄んだ声で鳴き、さえずり、黄色の羽を持ち、高い羽音を立てて、翼で空気をかき乱す。また、山の谷間には、獣の野生の種族を置かれた。わたしたち死すべき者には、家畜をことごとく従わせられ、神がお造りになった者を、すべてのものの導き手として立てられた。そして、人に、まことに多様で、とらえきれないものを従わせてくださった[2]。2:36:10 実際、死すべき者たちの、どんな肉が、これらすべてを知ることができるだろうか。そうではなく、初めからこれらを造られたかたご自身だけが、知っておられる。朽ちることのない、永遠の造り主、高い天に住まわれるかたである。このかたは、善い者には、はるかに多くの善い報いを差し出される。しかし、悪い者と不正な者には、憤りと怒りを、また戦争と疫病と涙を誘う苦しみを、呼び起こされる。2:36:11 人間たちよ、なぜ、むなしく高ぶって、根こそぎ滅びるのか。いたちや獣を神にしていることを恥じよ。神々が皿を盗み、鍋をかすめ取るというのなら、狂気と心の乱れが、おまえたちの分別を奪っているのではないか。神々は、金色に輝く豊かな天に住むはずなのに、虫に食われた姿をさらし、厚いくもの巣に覆われている！　愚かな者たちよ、おまえたちは蛇や犬や猫を拝み、鳥と地を這う獣を敬う。石の像と、手で造った像を敬い、道ばたに積ん

だ石の山を敬う。おまえたちはこれらのものを敬い、口にするのも恥ずかしい、ほかの多くのむなしいものを敬っている。2:36:12〔これらは〕[3]愚かな人間たちの神々で、心に偽りを抱いている。その口からは、死をもたらす毒が流れ出る。しかし、いのちと、朽ちることのない永遠の光とをお持ちになり、〔甘い〕[4]蜜よりも甘い喜びを人々にお注ぎになるかたがおられる。ただこのかたにだけ首をかがめ、道を、敬虔な世々へと向けなければならない。2:36:13おまえたちはみな、これらすべてを捨てて、裁きに満ちた杯を、愚かさのうちに、狂った霊で飲み干した。それは濃く、強く、重い、まったく混ぜ物のない酒である。そして、酔いからさめて正気の心に立ち返ろうとも、すべてを見渡しておられる王なる神を知ろうともしない。2:36:14そのため、燃えさかる火の輝きが、おまえたちに臨む。おまえたちは、役に立たない偶像をめぐる偽りのゆえに辱められ、永遠に、日がな一日、炎に焼かれる。しかし、まことの、永遠の神を敬う者たちは、いのちを受け継ぐ。彼らは永遠の時にわたって、〔ともに〕[5]楽園の豊かに茂る園に住み、星の輝く天からの甘いパンを食べる』。2:36:15つまり、これらのことが真実で、有益で、正しく、すべての人間にとって愛すべきものであることは明らかです。また、悪を行った者たちが、その行いに応じて、必ず罰を受けることも明らかです。

2:37:1さらに、詩人たちのうちのある者たちも、これらのことを語りました。いわば自分たちへの託宣として、また不正を行う者たちへの証しとして語り、その者たちは罰を受けることになると言ったのです。アイスキュロスは言いました。『実際、行った者は、受けもしなければならない』。2:37:2ピンダロスもまた言いました。『何かを行う者は、受けもするのが当然だから』。エウリピデスも同じです。『受ける苦しみに耐えよ。行うときには喜んでいたのだから。敵を、どこであれ捕らえたところで、ひどい目にあわせることは、おきてにかなう』。2:37:3また、同じエウリピデスが言います。『敵をひどい目にあわせることは、男の本分だとわたしは思う』。アルキロコスも同じです。『わたしは一つの大事なことを知っている。〔何か〕[6]ひどいことをする者には、恐ろしい災いで報いることだ』。また、神はすべてを見渡しておられ、何ものも神の目を逃れません。ただ、神は寛容なかたなので、裁こうとされるときまで忍んでおられます。このことについても、ディオニュシオスが言っています。『正義の女神の目は、静かな顔から見つめるように、すべてを等しく、常に見ている』。2:37:4また、神の裁きがやがて行われ、災いが悪人たちを突然とらえることになります。このことも、アイスキュロスが示して、こう言いました。『実に、災いは足早に死すべき者たちに来る。おきてを踏み越える者に、その過ちに応じて。2:37:5おまえは、ものを言わない正義の女神を見る。だが、眠る者にも、歩く者にも、座る者にも、女神の姿は見えない。女神は、すぐに横合いから追いつく。あるときは、後になって追いつく。夜も、悪を行った者を覆い隠しはしない。おまえが何か恐ろしいことをするなら、だれかが見ていると思え』。2:37:6また、シモニデスも、こう言っているではありませんか。『人間にとって、思いがけない災いというものはない。わずかな時のうちに、神はすべてをひっくり返す』。さらに、エウリピデスは言います。『悪人の幸運も、おごり高ぶった富も、決して確かなものと思ってはならない。不正な者たちの子孫もそうだ。何ものからも生まれなかった時が、人間の悪をあらわにするからだ』。2:37:7さらに、エウリピデスは言います。『実際、神的なものは、悟りのないものではない。そうではなく、悪く結ばれた誓いや、無理に結ばされた誓いを、悟ることができる』。また、ソフォクレスは言います。『もし恐ろしいことに手を伸ばしたなら、おまえは恐ろしいことを受けもしなければならない』。2:37:8こうして、神が不正な誓いや、そのほかの何かの過ちを調べられることについては、彼ら自身も、ほとんど予告していました。また、世界が火で焼き尽くされることについても、彼らは望んでも望まなくても、預言者たちと合うことを語りました。もっとも、彼らは預言者たちよりずっと後の時代の者で、これらのことを律法と預言者たちから盗んだのです。

2:38:1実際、彼らが後の者であろうと、先の者であろうと、何の違いがあるでしょうか。ただ、少なくとも、彼ら自身も預言者たちと合うことを語ったのです。さて、世界が火で焼き尽くされることについては、預言者マラキがこう予告しました。『見よ、主の日が、燃える炉のように来る。そして、すべての不信心な者を燃やす』（マラキ四・一）。2:38:2また、イザヤも言います。『神の怒りが、激しく降りそそぐひょうのように、谷を押し流す水のように来るからである』（イザヤ三〇・二八、三〇）。そういうわけで、シビュラとほかの預言者たち

も、さらには詩人たちや哲学者たちも、明らかにしてきました。義と裁きと刑罰についてです。そればかりか、摂理についても語りました。神は生きているわたしたちだけでなく、死んだ者たちのことも心にかけておられる、と言ったのです。彼らは不本意ながら[7]そう言いました。真理によって責められたからです。2:38:3 預言者たちのうちでは、ソロモンが、死んだ者たちについてこう言いました。『肉にはいやしがあり、骨には手当てがあるであろう』（箴言三・八）。ダビデも同じことを言います。『砕かれた骨は喜ぶであろう』（詩篇五一・八）。2:38:4 これらと合うことを、ティモクレスも言いました。『寛大な神は、死んだ者たちにあわれみを施す』。こうして、歴史家たちは、多くの神々について語りながら、ひとりの支配に行き着きました。摂理がないことについて語りながら、摂理について語りました。裁きがないと言いながら、やがて裁きがあることを認めました。また、死後に感覚があることを否定した者たちも、それを認めました。2:38:5 たしかに、ホメロスは『魂は夢のように飛び去って、ひらひらと漂う』と言いながら、別の所ではこう言います。『魂は手足から飛び去って、冥府へ去った』。また、こうも言います。『できるだけ早くわたしを葬ってくれ。冥府の門をくぐれるように』。2:38:6 あなたが読んだほかの者たちについては、彼らがどのように語ったかを、あなたはよく知っているとわたしは思います。これらのことはすべて、神の知恵を求め、信仰と義と善い行いによって神に喜ばれる人なら、だれでも悟るでしょう。2:38:7 実際、わたしが先に書いた預言者たちのひとり、ホセアという名の預言者が、こう言いました。『だれが知恵ある者で、これらのことを悟るだろうか。だれが悟りある者で、これを知るだろうか。主の道は直く、正しい者はその道に入るが、不信心な者はその道でつまずくからである』（ホセア一四・九）。2:38:8 ですから、学ぶことを好む人は、好んで学ばなければなりません。それで、もっとたびたび会うように努めなさい。生きた声を聞いて、真理を正確に学ぶためです。

訳注

1 写本は『死すべき者すべてのうちにあって』と読む。
2 写本は『たやすくとらえられる』と読む。
3 この語は写本になく、後の刊本が補ったもの。
4 この語は写本になく、後の学者が推定で補ったもの。
5 この語は写本になく、この詩を引く別の古代の著作家から補ったもの。
6 この語は写本になく、後の刊本が補ったもの。
7 多くの刊本は、ここを『みな』と読む。

第三巻 1〜6章　この書を書く理由、むなしい書き手たち、キリスト者への中傷

3:1:1 テオフィロスから、アウトリュコスへ、あいさつを送ります。歴史家たちは、むなしい名声を求めて、多くの書物を書きたがります。ある者たちは、神々や戦争や年代について書きます。また、ある者たちは、役に立たない神話や、そのほかのむなしい骨折りについても書きます。あなたも、今までそうした骨折りにいそしんできました。そして、その労苦には、ためらわずに耐えています。ところが、わたしと語り合ったのに、なお真理の言葉をたわごとだと思っています。わたしたちの書物は新しく、近ごろのものだと考えているからです。そこで、わたしも、神のお許しのもとで、わたしたちの書物の古さを、あなたのために、ためらわずにまとめて示しましょう。わずかな言葉で、あなたのために覚え書きを作ります。あなたがためらわずにそれを読み、ほかの書き手たちのたわごとを見抜くためです。

3:2:1 実際、書き記す者たちは、自分が確かだと言い張ることを、自分の目で見た者であるべきでした。そうでなければ、それを見た人々から正確に学んでいるべきでした。明らかでないことを書き記す者たちは、ある意味で、空を打っているからです（第一コリント九・二六）。3:2:2 実際、ホメロスがトロイア戦争を書き記して、多くの人を欺いたことが、ホメロスに何の益になったでしょうか。あるいは、ヘシオドスにとって、彼が神々と呼ぶ者たちの系譜の目録が、何の益になったでしょうか。あるいは、オルフェウスにとって、三百六十五の神々が、何の益になったでしょうか。オルフェウス自身は、生涯の終わりに、その神々を退けています。『遺言』の中で、神はただひとりだと言っているのです。3:2:3 また、アラトスにとって、世界をめぐる円を描いた天球の書が、何の益になったでしょうか。あるいは、彼と同じようなことを語った者たちにとって、何の益になったでしょうか。人間のあいだの名声のほかには、何もありません。しかも、その名声さえ、それに値して得たものではなかったのです。3:2:4 また、彼らが何か真実を語ったでしょうか。あるいは、エウリピデスやソフォクレスや、ほかの悲劇作家たちにとって、悲劇が何の益になったでしょうか。メナンドロスやアリストファネスや、ほかの喜劇作家たちにとって、喜劇が何の益になったでしょうか。ヘロドトスやトゥキュディデスにとって、その歴史が何の益になったでしょうか。ピュタゴラスにとって、奥の聖所とヘラクレスの柱が、何の益になったでしょうか。ディオゲネスにとって、キュニコス派の哲学が、何の益になったでしょうか。エピクロスにとって、摂理はないと説いたことが、エンペドクレスにとって、無神論を教えたことが、何の益になったでしょうか。ソクラテスにとって、犬や、がちょうや、プラタナスの木にかけて誓ったことが、何の益になったでしょうか。雷に打たれたアスクレピオスや、自分が呼び求めた悪霊どもにかけて誓ったことが、何の益になったでしょうか。3:2:5 また、何のために、彼は進んで死んだのでしょうか。死んだ後に、何の報いを、どのような報いを受けようと望んでいたのでしょうか。また、プラトンにとって、彼が打ち立てた学問が何の益になったでしょうか。ほかの哲学者たちにとって、その説が何の益になったでしょうか。彼らの数を数え上げることはしないでおきます。大勢いるからです。3:2:6 わたしがこれらのことを言うのは、彼らの考えが役に立たず、神を認めないものであることを示すためです。

3:3:1 これらの者たちはみな、むなしく空虚な名声に恋い焦がれて、自分で真実を知らず、ほかの人を真理へ促しもしなかったからです。実際、彼らが言ったことそのものが、彼らを責めています。彼らは、つじつまの合わないことを語ったからです。また、彼らの多くは、自分の説を崩しました。彼らは、互いの説を覆しただけではないからです。ある者たちは、自分自身の説さえ無効にしてしまいました。その結果、彼らの名声は、不名誉と愚かさに変わりました。悟りのある人々から、とがめられているからです。3:3:2 実際、彼らは、神々について語ったかと思えば、後には自分で無神論を教えました。あるいは、世界の誕生について語っても、最後には、すべてのものはひとりでに生じたと言いました。そればか

りか、摂理について語りながら、今度は、世界は摂理によらないと説きました。3:3:3 では、どうでしょうか。彼らは、慎み深さについて書こうとしながら、みだらな行いや不品行や姦淫を行うように教えたではありませんか。そのうえ、忌まわしい、口にできない行いまで持ち込んだではありませんか。しかも、まず自分たちの神々からして、口にできない交わりをし、おきてに背く食事をしたと言いふらしています。3:3:4 実際、クロノスが子を食らう者だと、だれが歌わないでしょうか。その子ゼウスがメティスを飲み込み、神々にけがれた食事を用意したことも、だれもが歌っています。そこでは、足の不自由なヘファイストスとかいう鍛冶屋が、神々に給仕をしたと言います。また、ゼウス自身の姉妹ヘラは、ゼウスと結婚しただけではありません。汚れた口で、口にできないことまでしたと歌われています。3:3:5 ゼウスについて詩人たちが歌う、そのほかの行いも、あなたはおそらく知っているでしょう。このうえ、ポセイドンやアポロン、ディオニュソスやヘラクレスのことを、わたしが数え上げる必要があるでしょうか。胸に抱かれるのを好むアテナや、恥知らずのアフロディテのことも、同じです。彼らについての論は、別の書で、もっと詳しく述べたからです。

3:4:1 実際、わたしがこれらのことを論駁する必要もなかったのです。ただ、あなたが今、真理の言葉について迷っているのを見るので、そうするのです。あなたは賢い人なのに、喜んで愚か者を忍んでいるからです（第二コリント一一・一九）。そうでなければ、あなたは、悟りのない人間たちのむなしい言葉に動かされて、惑わされることはなかったでしょう。また、前から広まっているうわさを信じることもなかったでしょう。神を認めない口が、神を敬う者であり、キリスト者と呼ばれるわたしたちを、偽って中傷しているのです。彼らの言い分では、わたしたちの妻はみなの共有であり、わたしたちは見境なく交わって暮らしているというのです。さらに、自分の姉妹とも交わっているというのです。そして、何よりも神を認めない、このうえなくむごたらしいことに、人間の肉に手をつけているというのです。3:4:2 そればかりか、彼らは、わたしたちの言葉が近ごろ現れたばかりのものだと言います。わたしたちには、自分たちの真理と教えの証拠として言えることが何もない、と言うのです。むしろ、わたしたちの言葉は愚かだと言います。3:4:3 さて、わたしは、とりわけあなたに驚いています。あなたは、ほかのことでは熱心にあらゆる事柄を探り求めるのに、わたしたちの言うことは、なおざりに聞いているからです。実際、あなたは、もしできるなら、夜でさえ図書館で過ごすのをためらわないでしょう。

3:5:1 では、あなたは多くの書を読んだのですから、ゼノンやディオゲネスやクレアンテスの書物の中身を、どう思ったでしょうか。それらは、人を食らうことを教えています。父親が自分の子供たちに煮られて食べられることを教えています。望まない者や、そのけがらわしい食べ物の手足一つでも捨てる者がいれば、食べなかったその者が食い尽くされる、とも教えます。3:5:2 これらに加えて、さらに神を認めない声が見つかります。ディオゲネスの声です。彼は、子供たちが自分の親をいけにえとして引いて行き、食べるように教えています。では、どうでしょうか。歴史家ヘロドトスも、作り話をしているではありませんか。カンビュセスがハルパゴスの子供たちを殺して煮て、その父親に食べ物として出した、というのです。3:5:3 さらに、インド人のあいだでは、父親たちが自分の子供たちに食べられる、とも作り話をしています。ああ、こうしたことを書き記した、いや、むしろ教えた者たちの、神を認めない教えよ。ああ、彼らの不敬虔と無神論よ。ああ、これほど念入りに哲学をし、哲学を名乗る者たちの考えよ。こうしたことを説いた者たちは、世界を不敬虔で満たしたからです。

3:6:1 実際、おきてに背く行いについては、哲学の一団の中でさまよった者たちの、ほとんどすべてが意見を同じくしています。まず第一に、プラトンです。彼は、彼らのうちで、ほかの者たちより重々しく哲学したと思われている人です。そのプラトンが、『国家』と題する書の第一巻で、はっきりと、ある意味で法を定めています。すべての者が妻を共有すべきだというのです。ゼウスの子で、クレタ人の立法者である者を手本にしているのです。口実のもとに、こうしたことから多くの子が生まれるためです。また、労苦する者たちは、このような交わりによって慰めを受けるべきだ、とでもいうのです。3:6:2 エピクロスもまた、無神論を教えるとともに、母や姉妹と交わるように勧めています。それを禁じる法を越えてまで勧めるのです。実際、ソロン[1]は、このことについてもはっきりと法を定めました。子供たちが、結婚した夫から正当に生まれるためです。生まれる者が姦淫から出ないようにするためです。だれかが、父でない者を父として敬っ

たり、本当の父を、父と知らずに侮ったりしないためです。3:6:3 また、ローマ人とギリシャ人のほかの法が、こうしたことが行われるのをどれほど禁じているかは、言わずにおきます。それなら、なぜ、エピクロスとストア派の人々は、姉妹と寝ることや男と寝ることを行うように説くのでしょうか。彼らは、そうした教えによって、3:6:4 図書館をいっぱいにしました。子供のころから、おきてに背く交わりを学ばせるためです。このうえ、彼らについて、わたしが手間をかける必要があるでしょうか。彼らは、自分たちのあいだで神々と言われる者たちについてさえ、同じようなことを言いふらしてきたのですから。

訳注

1 古い刊本は『ソロモン』と読むが、写し誤りとされる。

第三巻 7〜9章　哲学者と詩人の食い違い、神の律法

3:7:1 実際、彼らは、神々がいると言っておきながら、今度は神々を無に等しいものとみなしました。ある者たちは、神々は原子からできていると言い、またある者たちは、反対に、神々は原子へと散っていくと言ったからです。そして、神々は人間より少しも多くのことはできない、と言っています。3:7:2 また、プラトンは、神々がいると言いながら、神々を物質からなるものとしようとします。ピュタゴラスは、神々についてあれほど骨折り、上へ下へと旅をして回ったあげく、最後にはこう定めて言います。万物は自然によるもので、ひとりでに生じたのだ、と。神々は人間のことを少しも顧みない、というのです。3:7:3 また、アカデメイア派のクリトマコスが、無神論についてどれほど多くのことを説いたかは、言わずにおきます。では、クリティアスもそうではありませんか。アブデラのプロタゴラスも、こう言っているではありませんか。『そもそも神々については、いるのかどうかも、わたしは語ることができない。どのようなものかを明らかにすることもできない。わたしを妨げるものが多いからである』。3:7:4 実際、何よりも神を認めないエウヘメロスのことは、わたしが語ることさえ余計です。彼は、神々について多くのことを大胆に口にしたあげく、最後には、神々はまったくいないと言い張っているからです。そうではなく、万物は、ひとりでに生じる成り行きによって治められている、と言うのです。3:7:5 また、プラトンは、神のひとりの支配と人間の魂について、あれほど多くを語りました。魂は不死だと言っているのです。ところが、そのプラトン自身が、後には自分と食い違うことを言っていることがわかるではありませんか。ある魂はほかの人間に移り、ある者たちの魂は、理性のない生き物にまで入っていく、というのです。3:7:6 彼の説は、少なくとも知性を持つ人々には、恐ろしく、おきてに背くものに見えないはずがあるでしょうか。かつて人間であった者が、今度は狼や犬やろばや、そのほかの理性のない動物になる、というのですから。3:7:7 ピュタゴラスもまた、これと同じようなたわごとを言っていることがわかります。そのうえ、摂理を切り捨てているのです。では、わたしたちは、彼らのうちのだれを信じたらよいのでしょうか。喜劇作家のフィレモンでしょうか。彼はこう言っています。『神を敬う者たちは、救いへのよい望みを持っているのだから』。それとも、わたしが先に挙げたエウヘメロスやエピクロスやピュタゴラス、そのほかの者たちでしょうか。彼らは、神を敬うことを否み、摂理を打ち消しています。3:7:8 さて、神と摂理について、アリストンはこう言いました。『「安心せよ。神は、ふさわしい者すべてを助けるのを常とする。このような者たちなら、なおさらだ。正しく生きる者たちに、定められた誉れが備わらないのなら、敬虔であることに何の益があろう」。3:7:9 「本当にそうであればよいのだが。しかし、わたしは、いやというほど見ている。敬虔に生きることを選んだ者たちが、ひどい目にあっている。ところが、自分の得になることのほかには何も選ばない者たちが、わたしたちより尊ばれる境遇にある」。3:7:10 「それは、今のところのことだ。だが、遠くを見て、すべてのものの結末を待たなければならない。実際、ある人々のあいだでは、たちの悪い、生きるのに役立たない考えが力をふるっている。だが、その考えのとおりに、ひとりでに生じる流れがあるのでも、行き当たりばったりに裁かれるのでもない。卑しい者たちは、こうしたことすべてを、自分の生き方の支えとみなすからだ。3:7:11 むしろ、清く生きる者たちには誉れがあり、悪人たちには、ふさわしい罰がある。摂理によらずに起こることは、一つもないからだ」』。また、ほかの者たちや、ほとんど大部分の者たちが、神と摂理について語ったことがあります。それを見れば、彼らが互いにどれほどつじつまの合わないことを言ったかがわかります。ある者たちは、神も摂理もまったくないとしたからです。またある者たちは、反対に、神がいると立て、万物は摂理によって治められていると認めました。3:7:12 ですから、悟りのある聞き手や読み手は、語られることに注意深く心を向けなければなりません。シミュロスもこう言っています。『生まれつき度外れな者も、立派な者も、ひとしく詩人と呼ぶのが習いである。だが、見

分けるべきなのだ』。3:7:13 フィレモンも、同じように言っています。『座っている悟りのない聞き手は、厄介なものだ。愚かさのあまり、自分を責めないからだ』。ですから、語られることに心を向け、悟らなければなりません。哲学者たちや、また詩人たちが語ったことを、見分けながら吟味するのです。

3:8:1 実際、彼らは、神々がいることを否みながら、今度は自分で認めています。そして、その神々がおきてに背く行いをしたと言いました。まず第一に、ゼウスのひどい行いを、詩人たちはことさら声高らかに歌います。3:8:2 また、多くのたわごとを言ったクリュシッポスも、ヘラが汚れた口でゼウスと交わったと示していることがわかるではありませんか。実際、神々の母と言われる者のみだらな行いを、わたしが数え上げる必要があるでしょうか。人間の血に渇くラティアリスのゼウスや、去勢されたアッティスや、「悲劇役者」と呼ばれるゼウスのことも、同じです。このゼウスは、人々の話では、自分の手を焼いた[1]者ですが、今ではローマ人のあいだで神として崇められています。3:8:3 アンティノオスの神域や、神々と呼ばれるそのほかの者たちの神域については、黙っておきます。それらは、語られるだけで、悟りのある人々には物笑いの種になるからです。つまり、こうしたことを哲学した者たちは、自分たちの説によって、無神論のことで責められています。あるいは、見境のない交わりやおきてに背く交わりのことでも、責められているのです。そればかりか、人を食らうことさえ、彼らが書いた書物によって、彼らのもとにあることがわかります。しかも、まず自分たちが崇めてきた神々からして、こうしたことを行ったと書き記しているのです。

3:9:1 しかし、わたしたちもまた、神を認めます。ただし、ただひとりの神です。この全世界の創造者であり、造り主であり、作り手であるかたです。また、万物が摂理によって治められていることを知っています。ただし、このかたおひとりによってです。また、聖なる律法を学びましたが、その立法者はまことの神です。このかたは、正しいことを行い、神を敬い、善を行うように、わたしたちに教えてくださいます。3:9:2 そして、神を敬うことについては、こう言っておられます。『あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは自分のために、偶像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、あるいは地の下の水の中にあるもの、どんなものの形も造ってはならない。3:9:3 それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。わたしは、あなたの神、主だからである』（出エジプト二〇・三〜五）。また、善を行うことについては、こう仰せになりました。『あなたの父と母を敬え。これは、あなたが幸いを得るため、また、主なる神であるわたしがあなたに与える地で、あなたが長く生きるためである』（出エジプト二〇・一二）。3:9:4 さらに、義については、こう言っておられます。『あなたは姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。隣人について、偽証してはならない。隣人の妻をむさぼってはならない。隣人の家をむさぼってはならない。その畑も、しもべも、はしためも、牛も、ろばも、どんな家畜も、すべて隣人のものをむさぼってはならない』（出エジプト二〇・一三〜一七）。3:9:5 『あなたは貧しい者の訴訟において、裁判を曲げてはならない。あらゆる不正な言葉から遠ざからなければならない。罪のない者と正しい者とを殺してはならない。悪人を義としてはならない。賄賂を取ってはならない。賄賂は、見える人の目をくらまし、正しい言葉をそこなうからである』（出エジプト二三・六〜八）。3:9:6 さて、この神の律法に仕える者となったのは、神のしもべでもあるモーセです。モーセは、全世界のために、とりわけヘブル人のために仕えました。ヘブル人は、ユダヤ人とも呼ばれます。この人々を、昔、エジプトの王が奴隷にしました。彼らは、神を敬う清い人々、アブラハムとイサクとヤコブの正しい子孫だったのです。神はこの先祖たちを心に留められ、モーセを通して、思いもよらない驚くべきわざと不思議を行われました。こうして、彼らを救い出し、エジプトから導き出してくださったのです。荒野と呼ばれる所を通って、彼らを導かれました。また、彼らをカナンの地に連れ戻してくださいました。その地は、後にユダヤと呼ばれました。そして、律法をお授けになり、これらのことを彼らに教えてくださったのです。3:9:7 つまり、律法は、あらゆる義のために大いなる、驚くべきものです。その十の項目は、わたしが先に挙げたとおりです。

訳注

1 写本は「自分の手を水で洗い流した」と読む。

第三巻 10〜14章　律法と預言者と福音書の教え

3:10:1 さて、彼らは、血筋はヘブル人で、カルデヤの地から出た人々であり、エジプトの国で寄留の他国人となりました。そのころ飢饉が起こったので、彼らはエジプトに移らなければならなくなったのです。そこでは穀物が売られていたからです。彼らは、そこに長いあいだ寄留しました。このことは、神の予告どおりに彼らに起こったのです。こうして、彼らはエジプトに四百三十年寄留しました。そのため、モーセが彼らを荒野へ導き出そうとしていたとき、神は律法によって彼らにお教えになって、こう言われたのです。『あなたがたは寄留の他国人をしえたげてはならない。あなたがたは寄留の他国人の心を知っているからである。あなたがた自身、エジプトの国で寄留の他国人であったからである』（出エジプト二三・九）。

3:11:1 さて、神は、ご自分が彼らに授けられた律法に民が背いたとき、彼らを滅ぼすことを望まれませんでした。善いかた、あわれみ深いかただからです。そこで、律法を授けてくださったうえに、後には、彼らの兄弟たちの中から預言者たちも遣わしてくださいました。預言者たちが、律法のことを彼らに教え、思い起こさせ、もう罪を犯さないように、悔い改めへと立ち返らせるためです。しかし、もし彼らが悪い行いにとどまり続けるなら、地のすべての王国の手に引き渡される、と預言者たちは予告しました。そして、このことがすでに彼らの身に起こったことは、明らかです。3:11:2 さて、悔い改めについては、預言者イザヤが、すべての人に向けて広く、しかし民に向けてはっきりと、こう言います。『主を尋ねよ。主を見いだすときに、呼び求めよ。主があなたがたに近づかれるときには、悪しき者はその道を捨て、不法な人はその思いを捨てて、自分の神、主に帰れ。そうすれば、あわれみを受ける。主は、あなたがたの罪を豊かにゆるしてくださるからである』（イザヤ五五・六〜七）。3:11:3 また、別の預言者エゼキエルは、こう言います。『もし不法な者が、自分の行ったすべての不法から離れ、わたしの戒めを守り、わたしの定めを行うならば、彼は必ず生きる。死ぬことはない。彼の行ったすべての不義は、覚えられない。そうではなく、彼は、自分の行った義によって生きる。わたしは不法な者の死を望まず、彼が悪い道から立ち返って生きることを望むからである、と主は言われる』（エゼキエル一八・二一〜二三）。3:11:4 イザヤはまた言います。『深い、不法なはかりごとをめぐらす者たちよ、立ち返れ。あなたがたが救われるためである』（イザヤ三一・六）。また、別の預言者エレミヤは言います。『あなたがたの神、主に立ち返れ。ぶどうを摘む者が、そのかごに戻るように。そうすれば、あわれみを受ける』（エレミヤ六・九）。3:11:5 つまり、聖なる書の中で悔い改めについて言われていることは、数多くあります。いや、むしろ数えきれません。神は、人類をあらゆる罪から立ち返らせることを、いつも望んでおられるからです。

3:12:1 さらにまた、律法が語った義についても、預言者たちの言葉と福音書の言葉が、それと一致していることがわかります。霊を宿す人々はみな、神の一つの霊によって語ったからです。3:12:2 たとえば、イザヤはこう言いました。『あなたがたの魂から悪を除け。善を行うことをならい、公平を求め、不当に扱われる者を救い出せ。みなしごのために裁き、寡婦の訴えを弁護せよ』（イザヤ一・一六〜一七）。同じイザヤが、さらにこう言います。『不義のきずなをことごとく解き、無理強いの取り決めの結び目をほどけ。打ちひしがれた者を自由にして去らせ、不正な証文をすべて破り捨てよ。飢えた者にあなたのパンを裂いて与え、宿のない貧しい者をあなたの家に入れよ。裸の者を見たら、これに着せよ。あなたの血を分けた身内を見過ごしにしてはならない。3:12:3 そうすれば、あなたの光は暁のようにあらわれ出て、あなたのいやしは、すみやかに芽生える。あなたの義が、あなたの前を行く』（イザヤ五八・六〜八）。エレミヤも同じように言います。『道に立って、よく見よ。わたしたちの神、主の良い道がどれかを尋ねて、その道に歩め。そうすれば、あなたがたの魂のために安息を得る。3:12:4 正しいさばきを行え。これらのことの中に、あなたがたの神、主のみこころがあるから

である』（エレミヤ六・一六）。ホセア[1]も同じように言います。『公平を守り、天を堅くなさり、地を造られたかた、あなたがたの神、主に近づけ』（ホセア一二・六、一三・四）。3:12:5 また、別の預言者ヨエルも、これらと一致することを言いました。『民を集め、会衆を聖別し、長老たちを迎え入れ、乳房を吸う幼な子を集めよ。花婿はその寝室から、花嫁はそのへやから出て来よ。3:12:6 そして、あなたがたの神、主に熱心に祈れ。主があなたがたをあわれんでくださるように。そうすれば、主はあなたがたの罪を消してくださる』（ヨエル二・一六）。同じように、別の預言者ゼカリヤも言います。『全能の主はこう言われる。真実のさばきを行い、おのおの隣人にいつくしみとあわれみを施せ。やもめ、みなしご、寄留の他国人をしえたげてはならない。おのおの、心の中で兄弟に悪を抱いて、恨んではならない、と全能の主は言われる』（ゼカリヤ七・九〜一〇）。

3:13:1 また、慎み深さについて、聖なる言葉がわたしたちに教えているのは、行いで罪を犯さないことだけではありません。思いに至るまで、罪を犯さないことも教えています。心の中で何か悪いことを考えることさえせず、目で他人の妻を見て情欲をいだくこともないように、と教えるのです。3:13:2 たしかに、王であり預言者でもあったソロモンは、こう言いました。『あなたの目は、まっすぐに見よ。あなたのまぶたは、正しいことに目くばせせよ。あなたの足のために、まっすぐな道を作れ』（箴言四・二五〜二六）。3:13:3 しかし、福音の声は、純潔について、もっと強く教えて、こう言います。『情欲をいだいて他人の妻を見る者はだれでも、心の中ですでに彼女と姦淫をしたのである』（マタイ五・二八）。3:13:4 また、こう言います。『夫から出された女をめとる者は、姦淫を行うのである。また、不品行以外の理由で妻を出す者は、その女に姦淫を行わせるのである』（マタイ五・三二）。さらに、ソロモンは言います。『人は火を着物に包んで、その着物が焼かれないであろうか。3:13:5 また人は、燃える炭火の上を歩いて、その足が焼かれないであろうか。そのように、夫のある女のところに入る者は、罰を免れることはできない』（箴言六・二七〜二九）。

3:14:1 また、わたしたちが、ある人々の思うように同じ民族の人々にだけ好意を持つことのないように、預言者イザヤはこう言いました。『あなたがたを憎む者たち、忌み嫌う者たちに、「あなたがたはわたしたちの兄弟だ」と言え。主の名があがめられ、彼らの喜びのうちに現れるためである』（イザヤ六六・五）。3:14:2 そして、福音書は言います。『あなたがたの敵を愛し、あなたがたをはずかしめる者たちのために祈れ。実際、あなたがたが自分を愛する者を愛したとしても、どんな報いがあろうか。そのようなことは、強盗も取税人もしている』（マタイ五・四四、四六）。3:14:3 また、善を行う者たちには、誇らないように教えています。人にへつらう者とならないためです。実際、福音書はこう言います。『あなたの左の手に、あなたの右の手のしていることを知らせるな』（マタイ六・三）。3:14:4 さらにまた、神の言葉は、支配者たちと権威ある者たちに服し、彼らのために祈るように、わたしたちに命じています（テトス三・一、第一テモテ二・一）。わたしたちが安らかで静かな一生を過ごすためです（第一テモテ二・二）。また、すべての人に、すべてのものを返すように教えています。敬うべき者は敬い、恐るべき者は恐れ、貢を納むべき者には貢を納めるように。すべての人を愛することのほかは、だれにも何の借りもないように、と教えるのです（ローマ一三・七〜八）。

訳注

1 写本は『モーセ』と読む。

第三巻 15〜19章　キリスト者の暮らしと洪水の物語

3:15:1 それなら、考えてみなさい。このようなことを学ぶ人々が、見境なく生き、おきてに背く交わりに染まることができるかどうかを。あるいは、何よりも神を認めないことである、人間の肉に手をつけることができるかどうかを。わたしたちには、剣闘士の見世物を見ることさえ禁じられているのです。人殺しにあずかる者、その立ち会い人とならないためです。3:15:2 いや、ほかの見世物も見てはなりません。そこで歌われる声にあずかって、わたしたちの目と耳が汚されないためです。実際、人を食らうことを言うなら、そこではテュエステスとテレウスの子供たちが食べられています。姦淫のことを言うなら、人間の姦淫だけではありません。神々の姦淫も、彼らのもとでは悲劇として演じられています。彼らは、その神々のことを、栄誉と賞品を受けて、美しい声で告げ知らせているのです。3:15:3 しかし、キリスト者には、そのようなことをしようと思うことさえ、とんでもないことです。キリスト者のもとには、慎みがあります。自制が修められ、一夫一婦が守られ、純潔が保たれています。不義は打ち滅ぼされ、罪は根こそぎにされ、義が励まれています。律法に従って暮らし、神を敬うことを行い、神を告白しています。真理が支配し、恵みが守り、平和が覆っています。聖なる言葉が導き、知恵が教え、いのちが支配し、神が王として治めておられます。3:15:4 さて、わたしたちの生き方についても、すべての被造物の神であり造り主であるかたの定めについても、語ることは多くあります。しかし今は、これだけ触れれば十分だと思います。あなたにも、とりわけここまで読んできたことによって、心を留めてもらうためです。あなたがここまで学ぶことを好んできたように、これからも学ぶことを好む人であるためです。

3:16:1 また、神のお許しのもとで、今、年代のことも、あなたにもっと詳しく示したいと思います。わたしたちの教えが、新しいものでも作り話でもないことを、あなたが知るためです。そうではなく、確かでないことを書いたすべての詩人と歴史家よりも、古く、真実なのです。3:16:2 実際、世界は生じたものではないと言った人々は、果てしのないところへ行ってしまいました。一方、世界は生じたものだと言ったほかの人々は、すでに十五万三千七十五年が過ぎたと言いました。3:16:3 たしかに、このことはエジプト人アポロニオスが記しています。しかし、ギリシヤ人の中でだれよりも賢くなったと思われているプラトンは、どれほどのたわごとに陥ったことでしょう！　実際、『国家』と題された彼の書に、はっきりとこう記されています。『そもそも、これらのものが今の整えられたまま、いつまでも続いたなら、どうして何か新しいものが見いだされただろうか。3:16:4 それが、一万年の一万倍ものあいだ、当時の人々に知られないままであったことは、言うまでもない。しかし、それが現れてから、千年、あるいはその二倍の年がたつ。あるものはダイダロスから、あるものはオルフェウスから、あるものはパラメデスから明らかになったのである』。3:16:5 このことが起こったと言って、プラトンは、洪水からダイダロスまでを一万年の一万倍としているのです。また、世界中の町や住まいや民族について多くのことを言ったうえで、それを推測で言ったと認めています。3:16:6 実際、彼はこう言っています。『客人よ、もしだれか神が、わたしたちにこう約束してくれるなら。わたしたちが立法の考察に取りかかるならば、今語られたことよりも（以下略）』。明らかに、プラトンは推測で言ったのです。そして、推測で言ったのなら、彼の言ったことは真実ではありません。

3:17:1 ですから、むしろ神の立法の弟子とならなければなりません。プラトン自身も認めているとおりです。神が律法によって教えてくださらなければ、ほかの仕方では正確なことを学ぶことはできない、と。3:17:2 では、どうでしょう。詩人のホメロスもヘシオドスもオルフェウスも、自分たちは神の摂理から学んだと言ったではありませんか。さらに、歴史家たちの時代に占い師や先を知る者たちがいて、その人々から学んだ者たちが正確に書き記した、と言われています。3:17:3 それなら、わたしたちは、なおさら真実を知るのではありませんか。わたし

たちは、神の聖霊を受けいれた聖なる預言者たちから学んでいるのです。そのため、預言者たちはみな、互いに親しく調和したことを語り、全世界に起こるはずのことを前もって告げ知らせました。3:17:4 実際、前もって告げられ、すでに成就した出来事があります。その結末そのものが、学ぶことを好む人々、いや、むしろ真理を好む人々に、はっきりと教えることができます。預言者たちによって告げ知らされたことが、本当に真実であることをです。それは、洪水の前の年代と時について告げ知らされたことです。つまり、世界が造られてから今に至るまで、年がどう積み重なってきたかということです。こうして、歴史家たちの偽りのたわごとを明らかにし、彼らの語ったことが真実でないことを示すためです。

3:18:1 実際、プラトンは、先に述べたとおり、洪水があったことを示して、それは全地に起こったのではないと言いました。そうではなく、平野にだけ起こり、いちばん高い山々に逃れた者たちが助かったというのです。3:18:2 また、ほかの人々は、デウカリオンとピュラがいて、このふたりが箱の中で助かったと言います。そして、デウカリオンは箱から出た後、石をうしろへ投げ、その石から人間が生まれたというのです。そのため、人間の群れは「民」（ラオイ）と呼ばれるのだ、と彼らは言います。3:18:3 さらにまたほかの人々は、二度目の洪水のときにクリュメノスがいたと言いました。たしかに、このようなことを書き、むなしく哲学した者たちは、みじめで、まったく神を敬わず、愚かであることがわかります。そのことは、先に述べたことから明らかです。3:18:4 しかし、わたしたちの預言者、神のしもべモーセは、世界の創造を詳しく記して、地の上の洪水がどう起こったかを物語りました。それだけではありません。洪水にまつわることがどのように起こったかも物語ったのです。モーセは、ピュラもデウカリオンもクリュメノスも、作り話として語ってはいません。平野だけが水に沈み、山々に逃れた者たちだけが助かった、とも語っていません。

3:19:1 また、二度目の洪水があったとも示していません。そうではなく、むしろ、もう世界に水の洪水は起こらないと言いました（創世記九・一一）。そのとおり、そのような洪水は起こっていませんし、これからも起こりません。また、モーセは、箱舟の中で助かった人間の魂は、全部で八つであったと言います。その箱舟は、神の命令によって造られました。造ったのはデウカリオンではなく、ノアです。ノアはヘブル語の名で、ギリシア語に訳せば「安息」です。わたしが別の書でも示したとおり、ノアは、当時の人々に洪水が来ようとしていることを告げ知らせて、彼らにこう預言しました。「来なさい。神があなたがたを悔い改めへと招いておられます」。そのため、ノアは、ふさわしくもデウカリオンと呼ばれたのです。3:19:2 このノアには、三人の息子がいました。第二巻でも示したとおりです。その名はセム、ハム、ヤペテです。この三人には、ひとりにひとりずつ、三人の妻がいました。そして、ノア自身とその妻がいました。3:19:3 この人を、ある人々は「宦官」と呼んできました。こうして、箱舟の中にいた人間の魂、全部で八つが助かりました。モーセは、洪水が四十日四十夜続いたことを示しています。天の窓から水が流れ落ち、淵の源がことごとくわき出て、水がすべての高い山を十五キュビト越えるまで高くなったのです（創世記七・一一～一二、二〇）。3:19:4 こうして、当時のすべての人間の種族は滅びました。箱舟の中で守られた者たち、先に述べた八人だけが助かったのです。その箱舟の残骸は、今に至るまで、アラビヤの山々にあるとされています。つまり、洪水についての話は、かいつまんで言えば、このようなものです。

第三巻 20〜23章　エジプトとツロの記録

3:20:1 さて、モーセは、先に述べたとおり、ユダヤ人を導いた人です。ユダヤ人は、パロ王によってエジプトの地から追い出されたのです。この王の名はテトモシスです。この王は、民を追い出した後、二十五年と四か月、王であったと言われています。マネトーが数えているとおりです。3:20:2 その後は、ケブロンが十三年です。その後は、アメノフィスが二十年七か月です。その後は、その姉妹のアメッセが二十一年一か月です。3:20:3 その後は、メフレスが十二年九か月です。その後は、メフランムトシスが二十年十か月です。その後は、テュトモセスが九年八か月です。その後は、ダンフェノフィスが三十年十か月です。3:20:4 その後は、ホロスが三十六年五か月です。その娘が十年三か月です。その後は、メルケレスが十二年三か月です。その息子のアルマイスが四年一か月です。3:20:5 その後は、ラメセスが一年四か月です。その後は、メッセス・ミアンムーが〔六十〕六年と二か月です[1]。その後は、アメノフィスが十九年六か月です。3:20:6 その後は、トイッソス[2]とラメセスが十年です。このふたりは、それぞれの時代に、大きな騎兵の力と海軍の陣容を持っていたと言われています。さて、ヘブル人は、そのころエジプトに寄留し、先に述べた王テトモシスに奴隷にされて、この王のために堅固な町々を建てました。ピトムとラメセスとオン、すなわちヘリオポリスです（出エジプト一・一一）。ですから、ヘブル人は、当時エジプト人のもとで名高かった町々よりも、古いことが示されます。このヘブル人は、わたしたちの先祖でもあります。わたしたちは、聖なる書物も彼らから受けています。先に述べたとおり、その書物は、すべての歴史家の書いたものより古いのです。3:20:7 エジプトという国の名は、セトス王から付けられました。「セトス」という名は、「エジプト」とも呼ばれるからだと言われています。セトスには、アルマイスという名の兄弟がいました。この人はダナオスと呼ばれてきました。エジプトからアルゴスに来た人です。ほかの歴史家たちも、たいへん古い人として、この人に触れています。

3:21:1 ところで、マネトーは、エジプト人に都合よく、多くのたわごとを言いました。そのうえ、モーセと、彼とともにいたヘブル人に対して、冒涜的なことまで言いました。彼らが、らい病のためにエジプトから追い出されたかのように言ったのです。そのマネトーは、年代を正確に語ることができませんでした。3:21:2 実際、マネトーは、彼らを羊飼いと呼び、エジプト人の敵と呼びました。そのうち、羊飼いと呼んだのは、真理に責められて、心ならずも言ったのです。エジプトに寄留したわたしたちの先祖は、本当に羊飼いだったからです。しかし、らい病人ではありませんでした。3:21:3 実際、彼らはエルサレムと呼ばれる地に来て、後にそこに住みつきました。そこでは、彼らの祭司たちが、神の命令によって宮に仕え続けていました。その祭司たちが、当時どのようにあらゆる病をいやしたかは、明らかにされています。らい病人も、どんなきずも治すほどでした。3:21:4 宮を建てたのは、ユダヤの王ソロモンです。マネトーが年代について誤ったことは、彼自身が言ったことから明らかです。さらに、彼らを追い出した王、パロという名の王についても誤っています。3:21:5 その王は、その後もうエジプト人を治めなかったからです。実際、王は軍勢を率いてヘブル人を追い、紅海に沈んだのです。そのうえ、羊飼いたちがエジプト人と戦ったと言うのも、偽りです。彼らはエジプトを出て、それ以来、今もなおユダヤと呼ばれている地に住んできました。それは、ダナオスがアルゴスに来るより、三百十三年も前のことだからです。3:21:6 そして、多くの人が、このダナオスを、ギリシヤ人のもとのほかのだれよりも古いと考えていることは、明らかです。ですから、マネトーは、心ならずも、真理の二つの点を、自分の書いたものを通してわたしたちに告げたのです。第一に、彼らが羊飼いであったと認めたこと、第二に、彼らがエジプトの地から出たと言ったことです。こうして、これらの記録からも、モーセと彼とともにいた人々の古さが示されます。トロイア戦争より九百年、あるいは千年も前の人々なのです。

3:22:1 さらに、ユダヤにある宮の建設についても、ツロの人々のもとに記録があります。この宮は、ユダヤ人がエジプトを出てから五百六十六年後に、ソロモン王が建てたものです。宮がどのように建てられたかが書き記され、その文書が彼らの記録所に保存されているのです。その記録から、宮は、ツロの人々がカルタゴを建てるより百三十四年八か月早く建てられたことがわかります。それは、ツロの王で、アベイバロスの息子であるヒラムという人によって記録されました。ヒラムが、父の代からの付き合いで、ソロモンの友となっていたからです。また、ソロモンが持っていた、並はずれた知恵のためでもありました。3:22:2 実際、ふたりは難問を出し合って、たえず互いを鍛えていました。その証拠に、ふたりの手紙の写しが、今に至るまでツロの人々のもとに保存されていると言われています。また、ふたりは互いに手紙を送り合っていたのです。このことには、エペソのメナンドロスも触れています。メナンドロスは、ツロの王国の歴史を記して、こう言っています。『実際、ツロの王アベイバロスが死ぬと、その息子ヒラムが王位を継いだ。ヒラムは五十三年生きた。3:22:3 このヒラムの後を継いだのはバゾロスで、四十三年生き、十七年王であった。その後、メトゥアスタルトスは五十四年生き、十二年王であった。その後、その兄弟のアタリュモスは五十八年生き、九年王であった。3:22:4 このアタリュモスを、ヘレスという名の兄弟が殺した。ヘレスは五十年生き、八か月王であった。このヘレスを、アシタロテの祭司イトバロスが殺した。イトバロスは四十年生き、十二年王であった。3:22:5 このイトバロスの後を、息子のバゾロスが継いだ。バゾロスは四十五年生き、七年王であった。その息子のメッテノスは三十二年生き、二十九年王であった。このメッテノスの後を継いだのはピュグマリオンで、五十六年生き、七年王であった。3:22:6 その治世の第七年に、ピュグマリオンの妹[3]がリビヤに逃れて、今に至るまでカルタゴと呼ばれている町を建てた』。こうして、ヒラムの治世からカルタゴの建設までの年月は、全部で百五十五年八か月になります。3:22:7 そして、エルサレムの宮は、ヒラムの治世の第十二年に建てられました。ですから、宮の建設からカルタゴの建設までの年月は、全部で百三十三年八か月になります。

3:23:1 つまり、ピニケ人とエジプト人の証言については、これまで述べたことで十分としましょう。わたしたちにかかわる年代について、歴史を書いた人々が記録しているとおりです。エジプト人マネトーと、エペソのメナンドロスと、さらにヨセフスです。ヨセフスは、ローマ人がユダヤ人に仕掛けたユダヤ戦争を書き記した人です。3:23:2 これらの古い人々から、ほかの人々の著作も、モーセを通してわたしたちに与えられた書より新しいことが示されるからです。それどころか、後の預言者たちよりも新しいのです。実際、預言者たちの最後の人となったのはゼカリヤという名の人で、ダリヨスの治世に盛んに活動しました。3:23:3 それだけでなく、立法者たちもみな、後になって法を定めたことがわかります。実際、だれかがアテネのソロンを挙げるなら、ソロンはクロス王とダリヨス王の時代の人です。つまり、先に述べた預言者ゼカリヤの時代の人です。ゼカリヤは、モーセから、ずっと多くの年月の後に出た人です。あるいは、立法者のリュクルゴスやドラコンやミノスについて言うとしても、聖なる書物は、古さでこの人々にまさっています。モーセを通してわたしたちに与えられた神の律法の書は、クレテ人の王となったゼウスよりも古いことが示されるからです。さらには、トロイア戦争よりも古いのです。3:23:4 さて、わたしは、時と年代の証明をもっと正確なものにするために、神のお許しのもとで、今それを行います。洪水の後のことだけではありません。洪水の前のことも物語って、できるかぎり、すべての年の数を語るためです。そのために、世界の創造のいちばん初めにまでさかのぼります。その初めのことは、神のしもべモーセが聖霊によって書き記したものです。3:23:5 モーセは、世界の創造と生成、最初に形造られた人、またその後に起こったことを語って、洪水の前に過ぎた年も示したからです。わたしは、ただひとりの神に恵みを願い求めます。真実のことを、そのみこころに従って、すべて正確に語るためです。また、あなたも、これを読むすべての人も、神の真理と恵みに導かれるためです。3:23:6 では、まず、書き記された系図から始めましょう。つまり、最初に形造られた人から始めることにします。

訳注

1 写本は『六年』。ほかの史料に合わせて『六十』を補う。
2 すぐ後のセトスの名が崩れたものとみる説がある。
3 原文に主語はない。ほかの史料に従って補った。

第三巻 24〜26章　世界の創造からクロスまでの年代

3:24:1 アダムは、子を生むまでに、二百三十年生きました。その息子のセツは二百五年です。その息子のエノスは百九十年です。その息子のカイナンは百七十年です。その息子のマハラレルは百六十五年です。その息子のヤレドは百六十二年です。その息子のエノクは百六十五年です。その息子のメトセラは百六十七年です。その息子のレメクは百八十八年です。3:24:2 このレメクに生まれた息子が、先に述べたノアです。ノアは五百歳のとき、セムを生みました。ノアが六百歳のとき、洪水が起こりました。こうして、洪水までの年月は、全部で二千二百四十二年になります。3:24:3 洪水の後、すぐに、セムは百歳でアルパクサデを生みました。アルパクサデは百三十五歳でシラを生みました。シラは百三十歳で子を生みました。その息子のエベルは、百三十四歳で子を生みました。このエベルから、彼らの民族もヘブル人と呼ばれるようになったのです。その息子のペレグは、百三十歳で子を生みました。その息子のリウは、百三十二歳で子を生みました。その息子のセルグは、百三十歳で子を生みました。その息子のナホルは、七十五歳で子を生みました。その息子のテラは、七十歳で子を生みました。その息子が、わたしたちの族長アブラハムです。アブラハムは百歳でイサクを生みました。3:24:4 こうして、アダムからアブラハムまでの年月は、三千二百七十八年になります。先に述べたイサクは、子を生むまでに六十年生き、ヤコブを生みました。ヤコブは、エジプトへの移住まで、百三十年生きました。この移住のことは、先に述べました。ヘブル人のエジプトでの寄留は、四百三十年に及びました。そして、エジプトの地を出た後、彼らは荒野と呼ばれる所で四十年過ごしました。3:24:5 こうして、全部で三千九百三十八年になります。そのとき、モーセが死に、ヌンの子ヨシュアが後を継いで治めるようになりました。ヨシュアは二十七年、彼らの上に立ちました。ヨシュアの後、民は神の戒めから外れたので、メソポタミヤの王に八年仕えました。その王の名はクシャン・リシャタイムです（士師記三・八）。3:24:6 その後、民が悔い改めたので、彼らのためにさばきづかさたちが起こりました。オテニエルが四十年、エグロンが十八年、エホデが八年です。その後、彼らがつまずいたので、異国の民が二十年、彼らを支配しました。その後、デボラが四十年、彼らをさばきました。3:24:7 その後、ミデアンびとが七年、彼らを支配しました。その後、ギデオンが四十年、彼らをさばきました。アビメレクが三年、トラが二十三年、ヤイルが二十二年です。その後、ペリシテびととアンモンびとが十八年、彼らを支配しました。3:24:8 その後、エフタが六年、彼らをさばきました。イブザンが七年、エロンが十年、アブドンが八年です。その後、異国の民が四十年、彼らを支配しました。その後、サムソンが二十年、彼らをさばきました。3:24:9 その後、彼らのあいだに四十年、平和がありました。その後、サメラが一年、彼らをさばきました。エリが二十年、サムエルが十二年です。

3:25:1 さばきづかさたちの後、彼らのあいだに王たちが立ちました。最初の王はサウルという名で、二十年王でした。その後、わたしたちの祖先ダビデが四十年王でした。こうして、モーセの死からダビデの治世までの年月は、全部で四百九十八年になります。3:25:2 その後、ソロモンが王となりました。ソロモンは、神のみこころに従って、エルサレムの宮を初めて建てた人で、四十年にわたって治めました。その後は、レハベアムが十七年です。その後は、アビヤが七年です。その後は、アサが四十一年です。その後は、ヨシャパテが二十五年です。その後は、ヨラムが八年です。その後は、アハジヤが一年です。その後は、アタリヤが六年です。その後は、ヨアシが四十年です。その後は、アマジヤが三十九年です。その後は、ウジヤが五十二年です。その後は、ヨタムが十六年です。その後は、アハズが十七年です。その後は、ヒゼキヤが二十九年です。その後は、マナセが五十五年です。その後は、アモンが二年です。その後は、ヨシヤが三十一年です。その後は、エホアハズが三か月です。その後は、エホヤキムが十一年です。次に、もうひとりのエホヤキムが三か月十日です。その後は、ゼデキヤが十

一年です。3:25:3 これらの王たちの後、民は罪にとどまり続け、悔い改めませんでした。そのため、エレミヤの預言のとおり、バビロンの王がユダヤに攻め上って来ました。その名はネブカデネザルです。3:25:4 この王は、ユダヤ人の民をバビロンに移し、ソロモンが建てた宮を倒しました。バビロンへの移住の中で、民は七十年を過ごしました。3:25:5 こうして、バビロンの地での寄留までの年月は、全部で四千九百五十四年六か月十日になります。神は、預言者エレミヤを通して、民がバビロンに捕らえ移されることを予告されました。それと同じように、七十年の後に彼らが再び自分たちの地に帰ることも、前もってお示しになったのです。3:25:6 こうして、三十年[1]が満ちたとき、クロスがペルシャ人の王となりました。クロスは、エレミヤの預言のとおり、その治世の第二年に布告を出しました。その王国にいるユダヤ人はみな自分たちの国に帰り、神のために宮を建て直すように、と文書で命じたのです。その宮は、先に述べたバビロンの王が倒したものです。3:25:7 さらに、クロスは神の命令によって、自分の護衛であるセシバザルとミテレダテに命じました。ネブカデネザルがユダヤの宮から持ち去った器を、運び戻して宮に納めるように、と命じたのです。3:25:8 こうして、ダリヨスの第二年に、エレミヤが予告した七十年が満ちるのです。

3:26:1 ここから、わたしたちの聖なる書物が、どれほど古く真実であると示されるかを見ることができます。ギリシャ人やエジプト人の書物よりもです。ほかのどんな歴史家を挙げるとしても、同じです。3:26:2 実際、ヘロドトスとトゥキュディデスも、クセノフォンも、そのほかのどんな歴史家もそうです。その多くは、ほぼクロスとダリヨスの治世から書き始めました。昔の、それより前の時代について、正確なことを語る力がなかったからです。3:26:3 そもそも、彼らが語ったのが次のようなことなら、それのどこが大したことでしょうか。異民族の王であるダリヨスとクロスのこと、ギリシャ人ではゾピュロスとヒッピアスのことです。アテネ人とラケダイモン人の戦争や、クセルクセスの行いのことです。また、パウサニアスのことです。パウサニアスは、アテナの神域で、飢えて死ぬ危険にさらされた人です。さらに、テミストクレスとペロポネソス人の戦争のこと、アルキビアデスとトラシュブロスのことです。3:26:4 わたしの前に置かれた課題は、多くを語ることではないからです。そうではなく、世の初めからの年月の長さを明らかにし、歴史家たちの無駄な骨折りとたわごとを暴くためです。年月は、プラトンが言ったように、二万年の一万倍もあるのではありません。しかも、彼は、洪水から自分の時代までに、それほどの年が過ぎたと主張しているのです。また、先に述べたとおりエジプト人アポロニオスが記すように、十五万三千七十五年あるのでもありません。また、世界が生じたものではない、ということもなく、万物がひとりでに生じた、ということもありません。ピュタゴラスやそのほかの人々が、たわごとを言ってきたとおりではないのです。そうではなく、むしろ、世界は生じたものであり、万物をお造りになった神によって、摂理をもって治められています。そして、真理に従おうと望む人々には、すべての時と年月が示されるのです。3:26:5 ですから、わたしは、神のお許しのもとで、続く時代の順序も、できるかぎり説き明かしてみます。クロスまでは明らかにしたが、クロスより後の時代は示せないのでなおざりにしている、と思われないためです。

訳注

1 写本は『五十年』。『七十年』と直す刊本もある。

第三巻 27〜30章　クロスからウェルスまでの年代、全体の年数、結び

3:27:1 さて、クロスは三十八年王であった後、マッサゲタイの地でトミュリスに殺されました。そのときは、第六十二オリュンピア紀でした。そのころから、もうローマ人は、神が彼らを強めておられたので、大きくなっていきました。ローマは、アレスとイリアの子と伝えられるロムルスによって、第七オリュンピア紀に建てられていました。それは五月の朔日の十七日前のことで、そのころ一年は十か月と数えられていました。ですから、先に言ったとおり、クロスが第六十二オリュンピア紀に死んだとき、ローマの建設から二百二十年になります。そのときに、ローマ人を治めていたのは、タルクィニウス・スペルブスという名の人でした。彼は、初めて、ローマ人の何人かを追放し、少年たちを汚し、土地の者たちを去勢した人です。そのうえ、処女たちを汚してから、結婚させていました。3:27:2 そのため、彼は、ローマ人の言葉で、ふさわしくもスペルブスと呼ばれました。これは訳すと「高ぶる者」です。自分にあいさつする者には、ほかの者を通してあいさつを返させる、と初めて定めたのが、彼だったからです。彼は二十五年、王でした。その後は、一年ごとに替わる執政官、軍司令官、あるいは按察官が、四百五十三年治めました。その名を数え上げるのは、長すぎて余計なことだと思います。3:27:3 知りたい人がいれば、呼び出し役のクリュセロスが書き記した記録から見つけられるからです。クリュセロスは、マルクス・アウレリウス・ウェルスの解放奴隷となった人です。彼は、ローマの建設から、自分の主人である皇帝ウェルスの死まで、名前も年代も、すべてをはっきりと書き記しました。3:27:4 こうして、先に言ったとおり、一年ごとに替わる役人たちが、四百五十三年、ローマ人を治めました。その後、皇帝と呼ばれる人々が、次のように治めました。最初はガイウス・ユリウスで、三年四か月六日、王でした。3:27:5 その後は、アウグストが五十六年四か月一日です。テベリオが二十二年です。次に、もうひとりのガイウスが三年八か月七日です。クラウデオが十三年八か月二十四日です。3:27:6 ネロが十三年六か月二十八日です。ガルバが七か月六日です。オトが三か月五日です。ウィテリウスが六か月二十二日です。ウェスパシアヌスが九年十一か月二十二日です。3:27:7 ティトゥスが二年二十二日です。ドミティアヌスが十五年五か月六日です。ネルウァが一年四か月十日です。トラヤヌスが十九年六か月十六日です。3:27:8 ハドリアヌスが二十年十か月二十八日です。アントニヌスが二十二年七か月六日です。ウェルスが十九年十日です。こうして、皇帝ウェルスの死までの皇帝たちの年月は、二百二十五年[1]になります。3:27:9 クロスの死は、タルクィニウス・スペルブスがローマ人を治め始めたときにあたります。こうして、そこから、先に述べた皇帝ウェルスの死までの年月は、全部で七百四十一年[2]になります。

3:28:1 さて、世の初めからの年月の全体を、要点だけまとめると、次のようになります。世界の創造から洪水までは、二千二百四十二年でした。洪水から、わたしたちの祖先アブラハムが子を生むまでは、千三十六年です。3:28:2 アブラハムの子イサクから、民がモーセとともに荒野で過ごしていたときまでは、六百六十年です。モーセの死、つまりヌンの子ヨシュアの統治の始まりから、族長ダビデの死までは、四百九十八年です。3:28:3 ダビデの死、つまりソロモンの治世の始まりから、バビロンの地での民の寄留までは、五百十八年六か月十日です。クロスの治世の始まりから、皇帝アウレリウス・ウェルスの死までは、七百四十一年です。3:28:4 世界の創造から合わせると、全部で五千六百九十五年と、端数の月と日になります。

3:29:1 こうして、年代と、述べたことのすべてを集めてみると、預言の書の古さを見ることができます。また、わたしたちのもとにある教えが、神から出たものであることも見ることができます。その教えは新しいものではありません。また、ある人々が思っているように、わたしたちのことが作り話で偽りだということもありません。そうではなく、むしろ、もっと古く、もっと真実なのです。3:29:2 実際、タッロスも、アッスリヤ人の王であったベロスと、ティタンのクロノ

スに触れています。ベロスはティタンたちとともに、ゼウスと、ゼウスの側にいる神々と呼ばれる者たちに戦った、と言うのです。そこでは、ギュゴスも打ち負かされて、タルテッソスに逃れた[3]、と言っています。その地は、当時はアクテと呼ばれ、今はアッティカと呼ばれています。ギュゴスは当時、その地を治めていました。3:29:3 ほかの地方や町についても、それらがだれにちなんで呼び名を得たかを、数え上げる必要はないと思います。歴史をよく知っているあなたに対しては、なおさらです。つまり、モーセがすべての歴史家より古いと示されることは、明らかです。クロノスよりも、ベロスよりも、トロイア戦争よりも古いのです。モーセだけではありません。その後に出た預言者たちの多くも、そうです。3:29:4 タッロスの歴史によれば、ベロスはトロイア戦争より三百二十二年前の人だとわかるからです。そして、モーセがトロイアの陥落より、およそ九百年、あるいは千年も先立つことは、先に明らかにしました。3:29:5 クロノスとベロスは同じ時代に盛んだったので、多くの人は、クロノスがだれで、ベロスがだれなのかを知りません。ある人々は、クロノスを崇めて、これをベルとかバアルとか呼んでいます。とくに東の地方に住む人々がそうです。彼らは、クロノスがだれなのかも、ベロスがだれなのかも知らないのです。3:29:6 一方、ローマ人のもとでは、サトゥルヌスと呼ばれています。ローマ人も、自分たちのその神が、クロノスとベロスのどちらなのかを知らないからです。たしかに、オリュンピア紀の始まりは、イフィトスから祭儀として守られるようになった、と言われています。しかし、ある人々によれば、リモスからです。リモスは、イリオスとも呼ばれた人です。3:29:7 さて、年とオリュンピア紀の数がどういう順序になるかは、先に明らかにしました。つまり、わたしたちのもとの事がらの古さ[4]と年代について、その数の全体を、今、できるかぎり正確に述べたと思います。3:29:8 実際、たとえ見落とした年月があるとしても、それは、たとえば五十年か百年、あるいは二百年でしょう。何万年、何千年ではありません。プラトンやアポロニオスや、偽りを書き記したほかの人々が、先に言っていたようにではないのです。3:29:9 すべての年の数を、わたしたちは正確には知らないかもしれません。聖なる書物に、端数の月と日が書き記されていないからです。さらに、ここで述べている年代については、ベロッソスも声をそろえています。ベロッソスは、カルデヤ人のもとで哲学を修め、カルデヤ人の文書をギリシヤ人に知らせた人です。彼は、洪水やほかの多くのことを詳しく語って、モーセと合うことをいくつか言っています。3:29:10 そのうえ、預言者エレミヤとダニエルとも、部分的に一致することを言っています。バビロン人の王によってユダヤ人に起こったことを語っているからです。ベロッソス自身は、この王をナボポラッサル[5]と呼んでいますが、ヘブル人のもとではネブカデネザルと呼ばれています。3:29:11 また、エルサレムの宮についても触れています。宮がカルデヤ人の王によって荒らされたことです。また、クロスの治世の第二年に宮の基礎が据えられ、その後、ダリヨスの治世の第二年に宮が完成したことです。

3:30:1 しかし、ギリシヤ人は、真理の歴史に触れません。第一に、彼らが文字の技にあずかるようになったのが、最近のことだからです。彼ら自身もそれを認めて、文字は見いだされたものだと言っています。ある人々はカルデヤ人が、ある人々はエジプト人が、またほかの人々はピニケ人が見いだしたと言うのです。第二に、彼らは誤ってきたし、今も誤っているからです。神のことではなく、むなしく益のない事がらに触れているのです。3:30:2 実際、彼らは、ホメロスやヘシオドスやほかの詩人たちには、そのように熱心に触れます。しかし、朽ちることのない、ただひとりの神の栄光は、忘れただけではありません。そしりもしたのです。そのうえ、神を敬う人々を迫害してきましたし、今も日ごとに迫害しています。3:30:3 それだけでなく、美しい声で神をはずかしめる者たちには、賞品と栄誉を与えています。一方、徳に向かって励み、清い生活を修める人々のうち、ある者は石で打ち殺し、ある者は死に至らせました。そして今に至るまで、むごい責め苦にあわせています。3:30:4 そのため、このような人々は、当然、神の知恵を失い、真理を見いだしませんでした。それで、もし望むなら、真理の助言者[6]と保証を得るために、これらを丹念に読みなさい。

訳注

1 写本の数は崩れていて、挙げた年数を足して立て直した数。

2 写本は『七百四十四年』と読む。

3 このあたりで文が欠けているとみる説がある。

4　写本は『古さ』でなく『無神論』と読む。
5　写本は『アボバッサロス』と読む。

6　ほかの写本は『助言者』でなく『しるし』と読む。

アウトゥコスに

2026年11月23日版
著者　テオフィロス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/theophilus-to-autolycus/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/theophilus-to-autolycus
全文を、ギリシア語原文（Προς Αὐτολυκον）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。